掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成13年9月30日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第83号

旅館「東屋」跡記念碑 完成記念公開講座 盛会裡に終わる …… 1

芥川龍之介『蜃気楼』とその舞台

佐江衆一 有田裕一 佐藤和子 …… 2

鵠沼の歴史的家屋をたずねて⑧

林達夫の住んだ家 …… 12

二つあった『湘南文庫』 …… 伊藤 聖 …… 18

鵠沼文化史をかざる一齣 …… 金田元彦 …… 22

お店で見かけた“お嬢さん” …… 桑原玲子 …… 24

再録 鵠沼の林さん …… 芥川比呂志 …… 26

米軍撮影の航空写真について …… 伊藤 聖 …… 30

広田家 鵠沼を去る日 …… 鈴木三男吉 有田裕一 …… 32

夢の中で走った江ノ電 …… 青木 悠 …… 35

裕伊之助と鵠沼 …… 岡田哲明 …… 55

「鵠沼を語る会」活動の記録 …… 総務委員会 …… 63

編集後記

『新編相模風土記稿』(天保13年、1842)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

旅館「東屋」跡記念碑
完成記念公開講座

盛会裡に終わる

参加者260人　開会前から満席に

旅館「東屋」跡記念碑の完成を記念して、鵠沼公民館と「鵠沼を語る会」が共催した公開講座は、平成13年6月2日（土）午後2時から、鵠沼公民館一階ホールで開かれた。

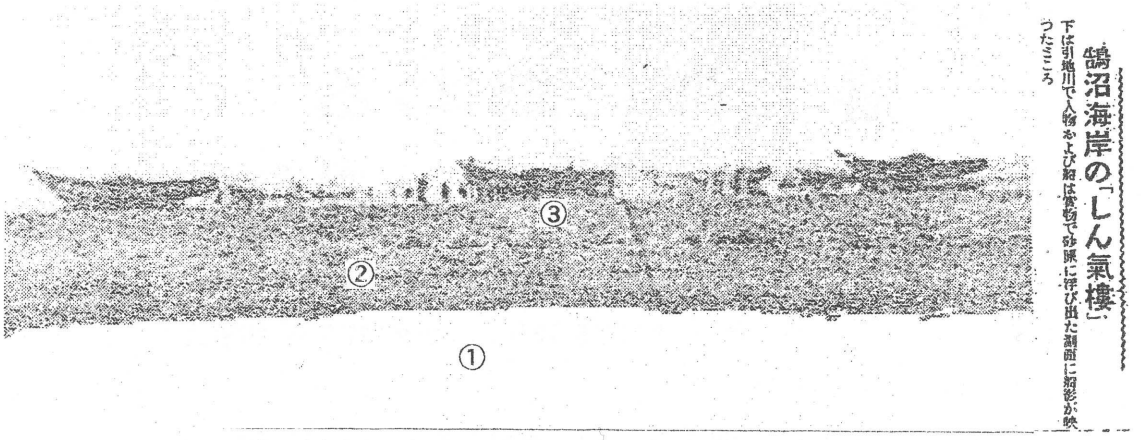
元藤沢市教育長小山文雄氏のお話し「東屋と文士たち」、作家佐江衆一氏の朗読と鑑賞「芥川龍之介『蜃気楼』を中心に」が演目だったが、人気作家佐江氏の朗読がその場で聞けるということもあって、会場には開会前から参加者が集まった。用意した230席の椅子はたちまちふさがって、結局、30人ほどの人が立ち見になるという盛況だった。

小山文雄氏の「東屋と文士たち」は、明治33年10月からほぼ半年にわたって東屋に泊まったいわば“逗留第1号”の文士斎藤緑雨と、大正期にはいって逗留した谷崎潤一郎を中心にして、東屋と文士たちの周辺をエピソード豊かに語ったものだった。

佐江衆一氏の朗読と鑑賞「芥川龍之介『蜃気楼』を中心に」は、照明を落とした壇上で、和服姿の佐江氏がしみじみと『蜃気楼』を朗読された。龍之介の死の直前に書かれた『蜃気楼』は「幻想的な傑作」とされているが、淡い照明の中で続けられた佐江氏の朗読もまた幻想的で、参加者は身じろぎもせずに聞き入った。

朗読の後、「鵠沼を語る会」の有田裕一、佐藤和子両会員が壇上に上がり、佐江氏の司会で小説『蜃気楼』の背景について語り合った。それが次ページに掲載した「芥川龍之介『蜃気楼』とその舞台」である。

有田さんは、大正初期から続く「有田商店」の四代目当主。「有田商店」は東屋とも縁が深く、岸田劉生の『鵠沼日記』にもその店の名前は登場する。佐藤さんは、龍之介の姪であり鵠沼に長く住んだ葛巻佐登子さんとの交流が深く、葛巻家に残された龍之介関連の資料整理にも関与した方である。



大正 15 年 10 月 28 日付東京朝日新聞に掲載された鵠沼海岸の蜃気楼

芥川龍之介
『蜃気楼』とその舞台

作　　家　　佐江 衆一
鵠沼を語る会　　有田 裕一
〃　　佐藤 和子

佐江　（朗読を終えて）先ほど申しましたように『蜃気楼』が書かれたのは昭和2年ですけれども、実際に蜃気楼が現れたのはその前の年、大正 15 年です。そのころのことを「鵠沼を語る会」の佐藤さんと有田さんにお話を伺って、皆様といっしょに話をしたいと思います。それでは有田さん、佐藤さん、おあがりください。

作品の最初のところに「鵠沼の海岸に蜃気楼が見えることはたれでももう知っているであろう。現に僕の家（うち）の女中などは逆さまに舟の映ったのを見、『この間の新聞に出ていた写真とそっくりですよ』などと」とありますように、当時新聞で大々的に紹介されたのです。そのことについて有田さんご説明いただけますか。

有田　これが大正 15 年 10 月 28 日の東京朝日新聞に出た写真でございます（上掲）。手前のこの部分①が引地川だそうで、これ②が砂浜、ここに舟がありまして、

この舟のと砂浜の間に空間があります。背を低くして見ますとこの部分③が湖水のような状態になりまして、この舟がさかさまに映っていると、この写真ではあまりはっきりとはわかりませんけれどもそういうような状態だったと聞いております。

鵠沼の砂濱に珍らしやしん氣楼の出現

横濱開港記念日に見学者は高工學生高木和男君

きのふ記者も實地に見學

汗だくになって新しい蜃気楼の現場

引地川の対岸から西北のほうをズウーッと見る。但し砂浜に腰をおろして見る。浜へ引き上げた舟の底から砂地の上へうすものの幕が降りたように夢まぼろしの境地が出来る。そこが蜃気楼の出現地である。この写真の舟がそれ。研究中の加藤教授と高木学生

神秘的な蜃気楼

砂上なる三間の海藻

又腰を下ろして見ませ

姥島は水平線上に浮上

興味ある蜃気楼の研究

大正15年10月27日　横浜貿易新報

これ（右）は大正15年10月27日の「横浜貿易新聞」、今の神奈川新聞ですが、その記事でございます。

ここには「引地川の対岸から西北のほうをズウーッと見る、但し砂浜に腰をおろして見る。浜へ引き上げた舟の底から砂地の上へうすものの幕が降りたように夢まぼろしの境地が出来る。そこが蜃気楼の出現地である。この写真の舟がそれ。研究中の加藤教授と高木学生」とあります。ここに高木学生とあるのが今日この会場にお見えになっていらっしゃいます高木和男さんです。元「鵠沼を語る会」の会長でいらっしゃいました。高等工業、現在の横浜国大の工学部ですが、その学生時代に蜃気楼に気づかれ、その発見によってこの記事が出たわけで、龍之介はこの新聞を見ましてこの作品を作るきっかけとなったのではないかと思っております（ここで会場の高木さんを紹介）。

龍之介たちが住んだ東屋の離れ

佐江　われわれも芥川の『蜃気楼』に沿って海岸へちょっと一緒に出て行って蜃気楼をみつけてみたいと思います。

「僕らは東家（あずまや）の横を曲がり、ついでにO君も誘うことにした」。大正15年です

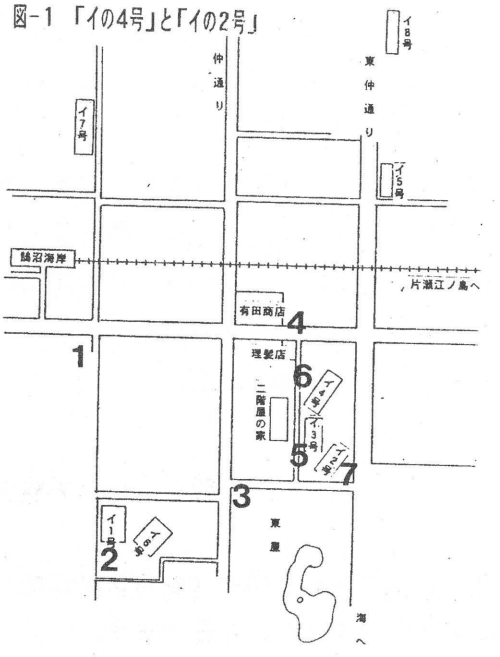
から大正 12 年9月の関東大震災の後に再建された東屋ですね。芥川龍之介全集（筑摩書房版）の年表によりますと、この大正 15 年は4月 22 日から5月 25 日まで「妻の実家のある鵠沼に行き、妻子とともに東家旅館に滞在」とあります。そしてなお「7 月上旬また鵠沼に行く。以後年内いっぱい鵠沼に滞在。東屋近くの貸家イの四号に転居。妻と也寸志と三人だけの生活をする」とあります。

三男の也寸志がその前の年に生まれていて、まだ赤ちゃんですね。三男の也寸志だけを連れて奥さんと行って女中を雇ったわけですけれども、この「イの四号」という貸家、そこを出て「東屋の横を曲がり、ついでにO君も誘うことにした。」とあります。このO君というのは小穴隆一という画家ですね。この人は芥川にとって非常に仲のよい親友といっていいと思います。二科会に芥川龍之介の肖像画などを出品していますけれど、芥川は最後には遺書もこの小穴隆一宛に書いています。子供たちに宛てた遺書には「小穴隆一を父と思へ」と書いています。また小穴隆一は龍之介の墓石の文字も書いています。というふうに親友ですね。

この「O君も誘うことにした」というのはどういうふうな道筋を通ったのでしょうか、O君はどこに住んでいたのでしょうか。それから東屋の横に出て海岸へどんなふうに出ていったのか、そのへんを教えていただきたい。

有田　東屋の離れの図がございます（**図—1**）。東屋を作った伊東将行のお孫さんにあたる故右近一夫さんにお聞きして書いたものなのですが、それをもとにしてご説明します。

図-1 「イの4号」と「イの2号」



小田急線の鵠沼海岸駅がありまして、これを出ましてこちらが現在の商店街です。一本目の角（1）を右に入りますと平成7年12月まで営業されておりました割烹料亭東家がこちら（2）にございました。以前「イの一号」があったところです。

二本目を右に入りますと今日のテーマであります東屋の記念碑がこちら（3）にございまして、これが本館の場所でございました。

三本目の路地（4）を右に入る角に理髪店がございますが、この理髪店は芥川の晩年の作品であります『歯車』の冒頭に出てくる理髪店だということをいわれております。

この路地を入りますと「イの二号」、「イの三号」、「イの四号」という東屋の離れがございました。「イの三号」（5）は現在右近さんの長女が喫茶店「シェ・モア」を経営していらっしゃいます。そのこちらに一夫さんの弟さんの辰之助さんがお住まいになっていらっしゃいまして、これが芥川の書簡その他で有名になっております「イの四号」（6）の跡でございます。

小穴隆一画伯はその大正 15 年の夏、この「イの二号」（7）に引っ越してきております。

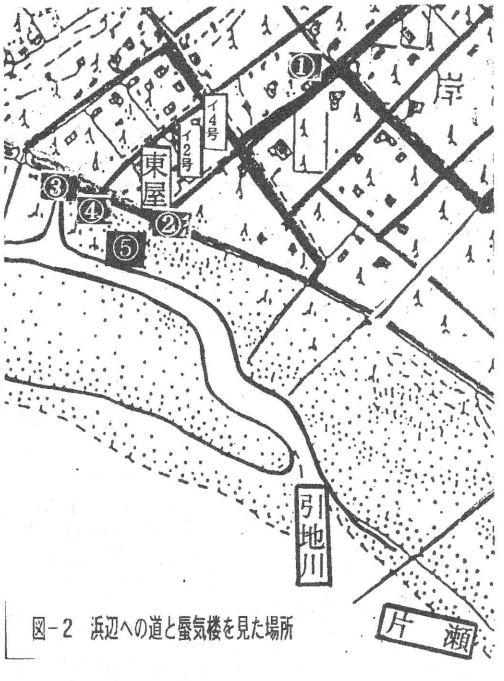
浜辺への道と蜃気楼を見た場所

佐江　O 君を誘ってということはどういう道筋を行ったのでしょう。

有田　文中で「東家の横を曲がり、ついでに O 君を誘うことにした。」ということなので、進行方向を左に曲って海へ向かったのではないかと思います。

佐江　そこに砂原があって、砂の中に牛車の轍が二すじあったということですね。それから次のところで「僕等はいずれも腹ばいになり、陽炎（かげろう）の立った砂浜を川越しに透かしてながめたりした。」とあります。川というのは引地川のことでしょうけれど、そのころの引地川は今と違うようですがどうだったのでしょうか。

有田　この引地川というのは放っておくと東へ東へと河口が移ってしまう癖があります。現在はがっちりと切ってありますから曲ってはきません。これは（**図－2**）大正 10 年の地図です。15 年ではないのですが、この「イの二号」から出ましてこちらが東仲通り①、現在は天金通りと呼ばれておりますけれどこれを出ま



図－2　浜辺への道と蜃気楼を見た場所

してこの道が鵠沼でもかなり古い道です。私の推測ですと、この道を右へ曲ってここのところ②で牛車の轍を見たのではないかと思います。この道は辻堂方面や鵠沼本村から片瀬の山本橋へ抜ける道だったので一応メイン道路であり、牛車も通ったであろうと推測しております。これを進行方向右に曲りましてここのところ③に古川という川があって鯉取橋という橋がありまして、ここがいま料理店「サイゼリア」ですか、ここに今も小川があって当時の面影があります。ここで水路が曲って今はこの古川が暗渠になってマンションなどがある広い道路になっています。

おそらく龍之介はここ④から入りまして一町ほど行っておりますから、このへん⑤で川越しに蜃気楼を見たようで、川の向こうへは渡ってないということがこの文章からわかります。

佐江　「イの四号」の間取り図について説明願いますか。「イの四号」という貸家に芥川が奥さんと也寸志と住んでいたということですが。

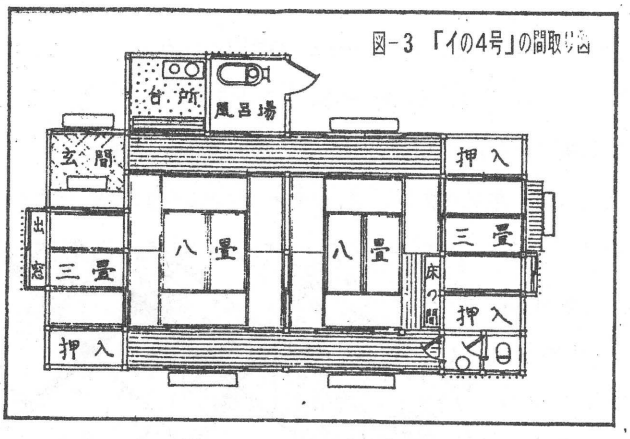


図-3 「イの4号」の間取り図

有田　これ(図―3)がその間取り図です。玄関がたたきになっておりまして自然石の踏み石がございまして、3畳と8畳の二間がありまして台所は土間です。この「イの二号」、「三号」、「四号」というのは点在しておりまして、中心部に池がございまして、池をめぐって離れが並んでいたという状態だったようです。

鵠沼の龍之介と妻文の家

佐江　それでは佐藤さんに伺います。芥川龍之介の奥さんの文(ふみ)さんの実家が鵠沼にあったということですが、奥さんの実家というのはどのへんにあって、どんな家だったのですか。奥さんというのはどちらの方ですか。

佐藤　奥様は東京で育った方なのです。本などを読んでおりますと鵠沼が実家ということで出てまいります。母のいた家ということでしょう、確かにその大正15

年には文の母、それから弟の八洲(やしま)が鵠沼海岸の3丁目に移り住んでおりました。

有田　家の位置を説明します。鵠沼公民館の通りを海の方へ進んで、小室ストアーの角を右へ曲ってしばらくいったところに葛巻さんという芥川龍之介の姪御さんが住んでいらっしゃいました。ここが今3軒の家になっていますけれど、この3軒合わせた一角が塚本家でした。現在の地番でいえば鵠沼海岸3-11-5あたりになります。

佐藤　大正15年には文の母と弟の八洲が療養生活を送りながらここにおりました。大正15年の4月からその年いっぱいまでの本当に短い鵠沼時代だったのですけれど、文にとりましては実家の近くで母親にいろいろと子供の面倒を見てもらったり、時にはちょっと留守のときに見回りにきてもらったり、それから八洲に付いていました看護婦を龍之介のために来てもらうなどしておりまして、龍之介の体調が非常に悪い時期でしたけれども、文にとってはしばし気持ちの休まった時ではなかったかと思います。

佐江　鵠沼におられた医師の富士さんについてお聞きします。東屋本館の二階七号、芥川がよく使った部屋におりました時、富士医師は往診にきて芥川龍之介を診たそうですが、この方は「語る会」の会員でもあったわけですね。このことと、その後富士さんがお書きになったものなどについてお話し願えませんか。

佐藤　富士山と書きまして「ふじたかし」と読まれました。平成3年に96歳で亡くなられましたが、90歳を過ぎましてもこの公民館にいらっしゃいましたり、それから図書室にもよくお顔を出しておられました。私ども「鵠沼を語る会」の中心的な存在で、いろいろとこの富士先生には教えていただきました。この富士山さんが、芥川が鵠沼時代東屋に滞在しておりましたころに、龍之介を診察いたしました。

佐江　そのころのことを富士さんが『文芸春秋』にお書きになったそうですが、それをお読みいただけますか。

佐藤　昭和10年の『文芸春秋』10月号に富士山さんは「芥川龍之介氏の憶ひ出」ということでご自分が診察なさったときの様子、それから龍之介の鵠沼時代がどのようだったかということをお書きになっていらっしゃいます。ちょっと長いので一部だけ読ませていただきます。これは大正15年7月27日に関する分です。

「其は土用の盛り、夕刻に近い頃だった。程近い東屋から芥川氏が悪いから診察を頼むとの電話で出掛けた。毎年のことながら夏場の東屋は避暑客で満員だっ

た。子供たちは廊下で騒いで居た。案内されたのは二階の一番奥六畳の室で、相模灘、江ノ島が手に取る様に見え眺望至極良い。初対面の氏は道すがら想像して来たとは別個の仁であった。文士という面影はどこにも無い、痩せた物静な人であった。梳らない頭髪は蓬々と伸びてゐる。どこか禅僧とでも云ひたい感じがした。氏は元来胃腸弱くアトニーと医師から言われて居るが、数日来亦々胃腸を害ね、下痢、疝病等で苦しい。加えて痔の工合も悪いとの訴であった。診察後食事につき注意を与えた。……超えて八月七日氏は突然来院された。頭は例の如く蓬々で、ヨレヨレの着物に細い帯をグルグル巻きにした無頓着で、少しも飾気ない風貌は今でも、一種の懐しみを以って我家の話題となって居る。其の時氏は年来の神経衰弱の話をした。不眠のためアダリン、カルモチン等を殆んど毎晩のむが 1 瓦以上のんでも利かぬ事、当時輸入された許りのヌマールや、アロナール等睡眠剤と云ふ睡眠剤はなんでも試みた様である。」

佐江　ありがとうございました。

こういうように芥川龍之介は大正 15 年から翌昭和 2 年にかけては大変神経衰弱が昂じて睡眠薬をたくさん飲んでいたわけですね。ですからそのときに書いた『蜃気楼』もそういう彼が、死を予感していたと思うのですね、そういう神経の芥川龍之介が小説家として死を予感しながら見た風景、……実は蜃気楼は見えなかったわけです、蜃気楼らしいものはね。でもここに出てくるたとえば水葬する人に付ける木札を拾ったり、三日目の夜に行ったときはマッチの火の中に浮かんでくるいろんなもの、そういういろいろな風物は芥川の死の予感の感覚が捉えたものではないかと思います。そういう意味ではこれはほかの人には書けなかったし、芥川自身この時でなければ書けなかった作品ですね。佐藤春夫がこの『蜃気楼』を激賞してこんな批評をしたと、岩波文庫で吉田精一さんが解説しています。

「死と戯れ遊んだという晩年の芥川以外の何人にも書けない不思議な美しさを文字の隅々から行間紙背にまで漂わせにじみ込ませた、芥川文学の最高のものであろう」

芥川自身も「これは大変よい作品だ」と自信があったようですね。また新しいところでは三島由紀夫なども大変ほめています。私もこれは大変傑作だと思うのです。

もうひとつ芥川が東屋本館の二階の七号室ですか、あそこにいて書いたもの、それからこの「イの四号」にいて書いたもので遺作、遺稿になったものがありま

す。それは『鵠沼雑記』です。最後にこれを少し朗読して終わりにしたいと思います。この『鵠沼雑記』は非常に断片的な作品で小品ですけれども、全部で 11 節あります。前半の 5 節は本館の七号室で書いています。それから後半の 6 節は「イの四号」で書いています。全部読めませんので前半から三つ、後半から二つ三つ読ませていただきます。大正 15 年 7 月に書いている遺稿になった作品です。まずは東屋で書いた作品。

「僕は鵠沼の東屋の二階にぢっと仰向けに寝ころんでゐた。その又僕の枕もとには妻と伯母とが差向ひに庭の向うの海を見てゐた。僕は眼をつぶったまま、『今に雨がふるぞ』と言った。妻や伯母はとり合はなかった。殊に妻は『このお天気に』と言った。しかし二分とたたないうちに珍らしい大雨になってしまった。」

「僕は全然人かげのない松の中の路を散歩してゐた。僕の前には白犬が一匹、尻を振り振り歩いて行った。僕はその犬の睾丸を見、薄赤い色に冷たさを感じた。犬はその路の曲り角へ来ると、急に僕をふり返った。それから確かににやりと笑った。」

「僕は風向きに従って一様に曲った松の中に白い洋館があるのを見つけた。すると洋館も歪んでゐた。僕は僕の目のせゐだと思った。しかし何度見直しても、やはり洋館は歪んでゐた。これは無気味でならなかった。」

以上東屋滞在中のものから読みました。これ以後は「イの四号」に移ってからです。

「僕はやはり散歩してゐるうちに白い水着を着た子に遇った。子供は小さい竹の皮を兎のやうに耳につけてゐた。僕は五六間離れてゐるうちから、その鋭い竹の皮の先が妙に恐ろしくてならなかった。その恐怖は子供とすれ違った後も、暫くの間はつづいてゐた。」

「僕はぼんやり煙草を吸ひながら、不快なことばかり考へてゐた。僕の前の次の間にはここへ来て雇った女中が一人、こちらへは背中を見せたまま、おむつを畳んでゐるらしかった。僕はふと『そのおむつには毛虫がたかってゐるぞ』と言った。どうしてそんなことを言ったか僕自身にもわからなかった。すると女中は頓狂な調子で『あら、ほんたうにたかってゐる』と言った。」

「僕はひとり散歩してゐるうちに歯医者の札を出した家を見つけた。が、二三日たった後、妻とそこを通って見ると、そんな家は見えなかった。僕は『確かにあった』と言ひ、妻は『確かになかった』と言った。それから妻の母にも尋ねて

見た。するとやはり『ありません』と言った。しかし僕はどうしても、確かにあったと思ってゐる。齒と本字を書き、イシャと片仮名を書いてあったから、珍しいだけでも見違へではない。(以上家を借りてから一大正15年7月20日)」

これで終わりにしたいと思います。

補遺

時間の都合で説明できなかった部分を追加いたします(佐藤)。

芥川と鵠沼のそもそもの関係はいつ始まったか?

龍之介は東京帝国大学文科1年22歳だった大正3年(1914)の正月4日から6日まで、鵠沼にある山本喜誉司(文の母の弟)の別荘に滞在しています。山本は府立三中時代から龍之介の友人で、龍之介がのちに結婚する塚本文にとっては母方の叔父に当たります。この山本喜誉司を通じて文との出合いが始まりました。

妻文と鵠沼との縁はいつ頃からか。龍之介とはどのような縁で結ばれたか。

文は明治33年7月8日、父塚本善五郎、母寿々(鈴)の長女として生まれ、弟八洲と二人姉弟として育ちましたが、5歳のとき軍人であった父が日露戦争で戦死。その後祖父母が相次いで他界したため、明治40年母と弟と三人で品川下高輪の東禅寺境内にあった家から本所相生町(現両国)の川端にあった母の実家に移りました。芥川の家の近くで、ともにすんでいた母の弟山本喜誉司のところへ龍之介は度々遊びに来ていました。当時文は7、8歳、龍之介は15歳ぐらいで、最初は幼い出合いでした。後、文一家三人は本郷弥生町へ転居し文は跡見女学校に入学しています。その後再び高輪の東禅寺境内の家へ移り、このころから二人は結婚を前提とするお付き合いが始まったようです。大正5年正月、生花を教えていた母寿々(鈴)はお正月の生花初めに弟山本喜誉司の級友である芥川を一日招待しました。龍之介はその日同行した友人恒藤恭あての手紙(2月15日付)に「僕自身前より good opinion を持つようになった」と書いています。文17歳、龍之介24歳でした。同年夏には久米正雄と滞在していた千葉県一の宮より求婚の手紙を出し、12月には婚約がととのいました。龍之介は横須賀海軍機

関学校に勤務しており、大正７年２月結婚、鎌倉大町の新居で生活が始まります。婚約時代文に宛てた手紙。

「こんどお母さんがお出での時ぜひ一しょにいらっしゃい　そのときゆっくり話しませう、二人きりで　いつまでもいつまでも話してゐたい気がします　さうして kiss してもいいでせう　いやならばよします　この頃ボクは文ちゃんがお菓子なら頭から食べてしまひたい位可愛い気がします　嘘ぢゃありません　文ちゃんがボクを愛してくれるよりか二倍も三倍もボクの方が愛して居るやうな気がします」（1917.11.17 付）

結婚後龍之介と文は牛込に住む母と弟の所に遊びに行っています。さらに「我鬼窟日録」（大正８年５月 25 日）には

「午後になって塚本八洲来る。十七で一高の試験を受けるのだから及第すれば二十三で学士になる訳である」とありましたが、八洲は寮生活の中で結核に感染、転地療養をすすめられ、母と八洲は鵠沼に行ってしまいます。この頃から文と鵠沼の縁が始まったのでしょうか。大正 14 年２月５日「澄江堂日録」には

「妻　比呂志を連れて牛込へ行く　八洲相不変のよし」

とあり、八洲も調子がよいと学校へ行っていたそうですから、この頃母も弟も又東京に戻っていたのでしょう。　大正 15 年から養生に来た鵠沼での一年に満たない日々は再び鵠沼に来ていた母と弟の家も近く、龍之介の体調が勝れないものの、空気の良い温暖な地であり、実家との往き来もあって田端の家から離れての生活は、文にとってある種の安らぎであったかもしれません。 龍之介なき後も、文は鵠沼へ疎開で移って来ています。昭和 19 年６月、比呂志は出征中、多加志も出征中、也寸志は陸軍戸山学校軍楽隊に在籍、20 年、終戦と共に也寸志、比呂志は相次いで鵠沼に戻りましたが、次男多加志は戦死。

昭和 24 年、文は鵠沼から上目黒に転居（龍之介と共に過ごした田端の家は昭和 20 年４月、空襲で焼失）、鵠沼の家には龍之介の甥葛巻義敏（昭和 60 年没）、姪葛巻左登子（平成 11 年没）の兄妹が芥川の資料を大切に保存しながら住んでいましたが、現在は建物も壊されてしまい、全てが遠い日の思い出になってしまいました。兄妹が大切にしていた資料は葛巻文庫として藤沢市文書館に収蔵されています。

鵠沼の歴史的家屋をたずねて⑧

林達夫の住んだ家

自ら設計した古英国風田舎家

鵠沼の建築物の中で、ひときわ特異な風格を見せているのが、鵠沼桜が岡にある林達夫の家である。林達夫はすでに昭和59年4月に亡くなり、現在はご長男一家がお住まいだ。

今回の「鵠沼の歴史的家屋をたずねて」は、この林達夫邸をとりあげる。ただし、いくつかの条件が重なった。

①ご家族の都合で家屋内部がみられないこと

②周囲に家が立て込んで、全景写真が撮影できないこと

などである。

そこで林達夫自身が、昭和13年の『婦人公論』に書いた「私の家――日本古農家を古英国風田舎家に――」をそのまま次ページ以降に転載することにした。中央公論新社と林家のご了解を得てのことである。同社と林家のご厚意に感謝したい。

なお、林家からは「語る会」の取材には協力するが、同家への個別的な来訪は、今後ともお断りしたい旨の意向が示された。特に付記しておきたい。

文中にもあるとおり、林邸は古農家の建材をそのまま利用して英国風の家屋に建て替えたものである。その古農家は藤沢・六会付近にあった。元のままの家屋構成と巨材の「味」を生かして、「趣味本位」「装飾過剰」を極力排して簡素と平凡を旨とした、と林達夫は書いている。

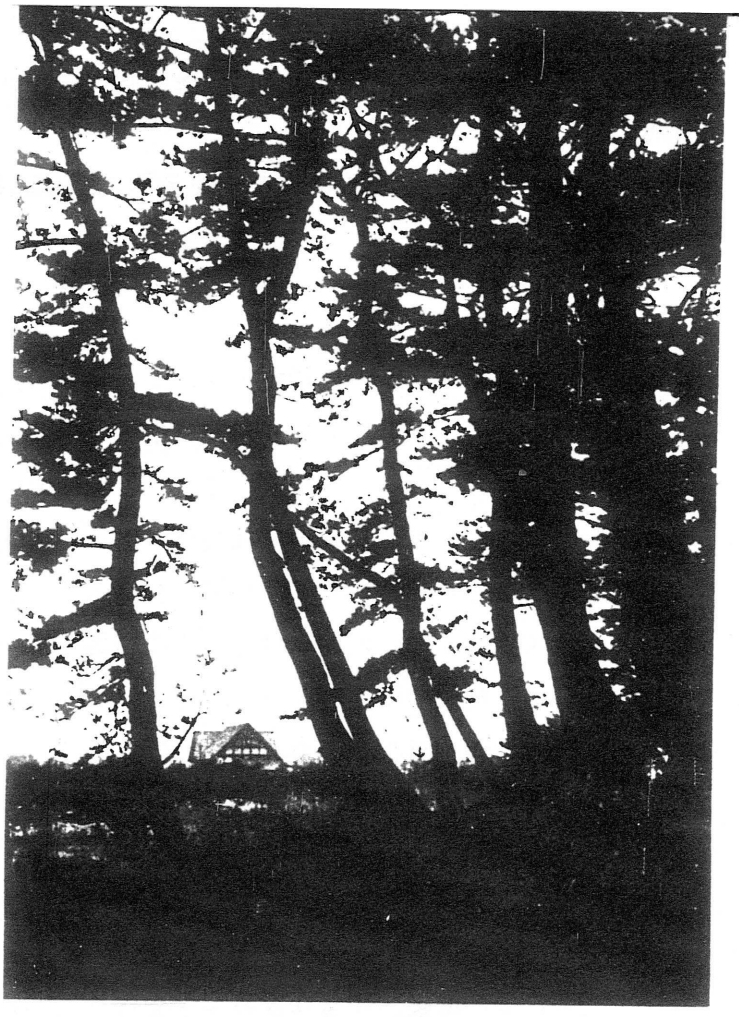
林邸は昭和12年末に完成した。すでに60年以上の歴史を経ているが、建物の雰囲気はほとんど当時のまま保たれていて、良き時代の鵠沼の名残を十分にとどめている。この林邸の雰囲気は、林達夫の義理の兄であった哲学者・和辻哲郎にも影響を与え、和辻も同様に古民家を再生した家を東京・練馬に建てた。和辻の家の一部はその後、東和映画社長川喜多長政が引き取り、鎌倉・雪の下の川喜多邸内に移築されて現存している。

林邸には多くの文化人が訪れた。芥川龍之介の長男で俳優・演出家の故芥川比呂志もその一人である。その訪問記は本誌26ページに掲載されている。ぜひ参照していただきたい。（敬称略）

私の家

——日本古農家を古英國風田舍家に——

林　達夫



『婦人公論』昭和13年10月号

グラビアのフロント・ページ

この2枚の写真については、原本には特別の解説はない。上の写真は、林邸から熊倉通りへ出て100㍍ほど海岸よりにあった丘の松林越しに撮影したものと思われる。右下の写真は林邸正面。

※　写真の転載について。

写真の掲載方法は、『婦人公論』昭和13年10月号の掲載通りではない。原本では記事中に切り込んであったりするため、本誌の体裁にあわせて編集し直した。

『婦人公論』昭和13年５月号より転載。

（旧漢字は当用漢字に直し、仮名遣いは原文のまま）

私の家

―日本古農家を古英国風田舎家に―

林　達夫

最新の機能主義住宅には幾多の長所と共にまた若干の欠陥がなくもない。例へば、あまりに「無駄」がないために、将来の生活膨張や生活方式の変化に適応してこれを包摂するゆとりもなく、だからさういふ意味での耐久性がないこと、また、その国際性は多くの場合、他国の社会経済的、風土的特殊性の上に生まれたものの直訳的移入に過ぎず、従ってわが国の社会的風土的条件に合はぬ不都合な点が多く、その誇称する「合理性」は却って能率低下、生活快適の減退を促し、また伝統的住宅ほど物質的耐久力を持ち合はさぬこと、だが、何よりもその簡単主義はヒューマニチーを無視してゐるため、住む人間が単なる生活器械の位置に貶められてゐること、等々である。わが国合理主義建築のいかに不合理的なものであるかを身に泌みて体験した人々の例を私たちは既に知ってゐる。フランスなどに最近起ってきたヒューマニズム建築の提唱なども、「合理主義」のこの不合理性に就いての反省に基いてゐるのだ。

わが国古農家などは黄嘴の建築技師などに言はせると凡そ不合理住宅の標本みたいなものだがその合理的構成や逞しい耐久力にかけては近頃のモダーン住宅などの比ではない。しかし何よりも私たちがそれに牽かれるのは、それのもってゐるヒューマニズム的雰囲気である。古い農家の煤けた巨大な柱や梁が恰も温かい血の通ってゐる頼もしい伴侶のやうにその親しみある安住感で我々をつつみ込むやうな経験をもたなかったものがあるだらうか。たゞ、憾むらくは、それは我々現代人の生活条件に応じた間どりや施設を持ってゐないだけである。

ここに現代住宅建築の一方法としての古農家改造といふものの存在していゝわけがあるのだ。古い立派な田舎家がどしどし取毀され、時には薪にして二束三文に売りとばされてさへゐる。養殖林のへなへなしたすぐに腐る木材と違って、その欅、松、杉、栗材はいづれも年ふりた壽木で、実に慎重に切り時を考へて切られてゐるから三百年や四百年は優に持久する。四五十坪の古農家はうまく行けば

書斎全景　前面右隅に大黒柱（一尺二寸角）が見える、それと小黒柱との間にはふだんヂャコビアン羽目板風の板戸が嵌まってゐる。中央に見えるモナスリー・テーブルは元農家にあった欅材の一枚板の棚でつくったもの。こんなテーブルが二つ出来た。

書斎より居間兼食堂を望む　右手にある元農家の古箪笥や千両箱は古英国的雰囲気とよく調和してゐるのに目をとめられたい。

二三百円でそっくり買へる。私はさういふ古い農家の一つを手に入れて、その元のまゝの構成と古い巨材の「味」とを利用して、これを古英国風（オールドイングリッシュ）に改築してみることを試みた。これには既に多少の先例がなくはないが、私はそんな場合殆どみんなが陥ってゐる「趣味本位」と「装飾過剰」とを極力排して、簡素と平凡とを旨とした。かういふ改装がどこまで可能であるかはこの写真をご覧になってみればわかるだらう。日本古農家と古英国風田舎家との間には人が想像する以上の共通性があるのである。

なおこの住宅は素人の私が西洋建築にまるで無智な凡庸な田舎大工を使って、全然専門家の協力を仰がずに独力で設計監督したといふ点でも一つの実験であった。私のやうな安上がりな建て方をしてみたい人もあることだらうから、いつかその経験を文章にしてお目にかけたいと思ふ。

林 達夫

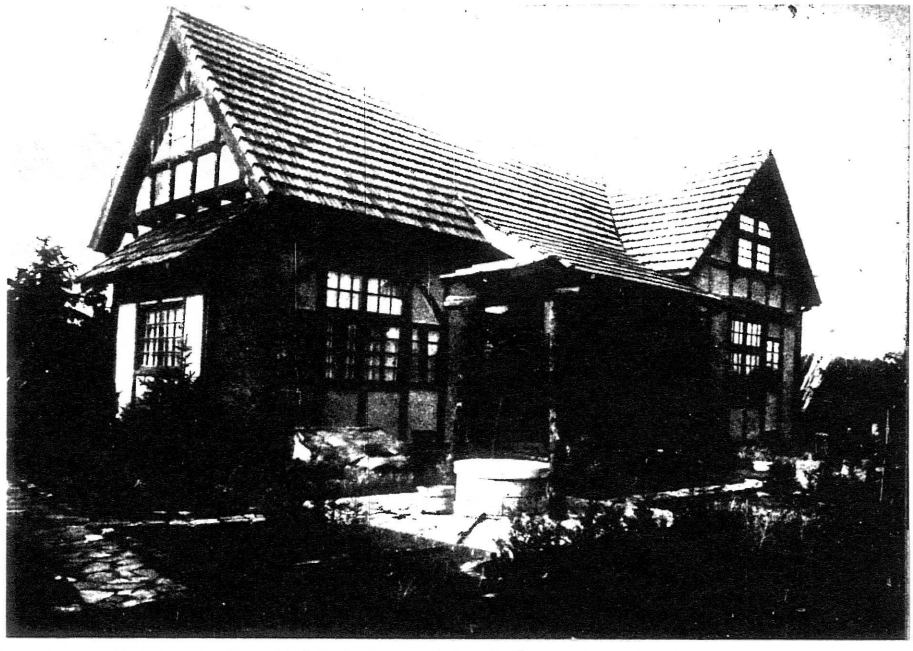
明治29年、東京生まれ。京都大卒。とくに西洋文化史への造詣が深く、岩波書店『思想』の編集をはじめ、中央公論社出版局長、鎌倉アカデミア文学科長などを務め、自由主義的思想家、有数の知識人として多方面に活躍した。

昭和30年、平凡社『世界大百科事典』の編集長に就任。33巻という膨大な大項目主義をとったこの事典は、日本における大百科事典出版の画期的な成果とされ、その後の百科事典ブームの先駆けともなった。

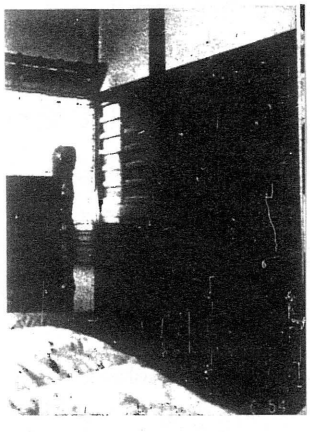
主著に『思想の運命』『歴史の暮方』、翻訳書にファーブル『昆虫記』（共訳）などがある。

林達夫の夫人・芳子（故人）は鵠沼を代表する名家・高瀬家の五女である。芳子の一番上の姉が高瀬照子で、この人は哲学者和辻哲郎と結婚した。つまり林達夫は夫人を通して和辻哲郎と義兄弟という関係にある。

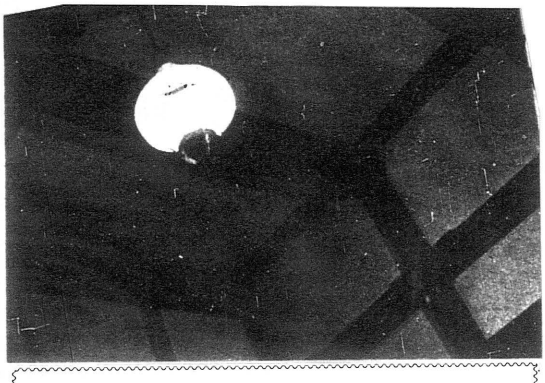
和辻哲郎も一時、藤が谷に住んだことがあり、こうした人々が、華やかな“鵠沼文化”の素地をつくった。(敬称略)



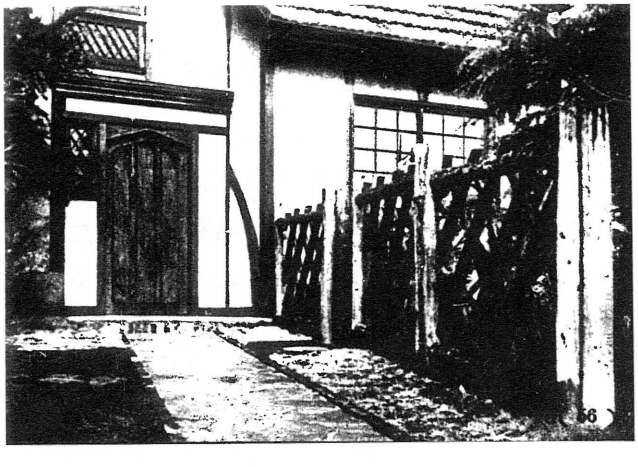
庭　ゴシック・ガーデン。まだ完成してゐない。草や木を配置してすっかり出来上がるのは一、二年後にならう。ノルマンヂー田舎風と日本風を折衷した井戸を設けた。菜園灌水、洗濯等に用ふ。



寝室の戸棚の一部　元農家にあった古戸棚をそのまゝ利用してある。



居間の天井　手斧の跡の見える古く煤けた梁がカーテン・家具と共に唯一の「装飾」になってゐる。



玄関と垣根　入口扉はテューダー様式。元農家にあった上がり框の欅材で作る垣根はイギリス田舎風、材料の丸太は元農家の小屋組に用ゐられてゐたものをそのまま使った。

二つあった『湘南文庫』

伊藤　聖（会員）

この話は今年（平成13年）５月22日から始まる。

その日、エッセイストとして活躍中の木村梢さんが来鵠されて、「鵠沼を語る会」の会員ら十数人と、いろいろ懐旧談をされた。木村さんは作家邦枝完二氏のご長女で、第２次大戦の末期に「鵠沼上岡六〇九八」に疎開されていた。戦後、映画「七人の侍」などで知られる俳優の木村功さんと結婚、しばらく鵠沼で新婚生活を送られている。

木村さんは「そのころ、鵠沼海岸の駅を出たところに『湘南文庫』という貸本屋があったのを、どなかた覚えておられませんか」と尋ねられた。会員から「駅前にあった鵠沼書店のことでは、ありませんか」と聞かれ、木村さんは「本屋ではなく、貸本屋でした」といわれる。「金田元彦さんの『私の鵠沼日記』という本に書いてあったような気がしますから、調べてご返事します」ということで、その日はそれ以上、この話は進まなかった。

＊　　＊　　＊

金田さんの『私の鵠沼日記』（1999年・風間書房）をみると、

「なくなった父の仕事の一つに『湘南文庫』がある。

終戦後、鎌倉で文士さんたちが、ご自分の蔵書をもちよって、『鎌倉文庫』をつくった。一種の貸本屋である。藤沢でも作ろうということになって、林達夫さん、のちに銀座に店をお開きになった伊東安兵衛さん、それに映画評論家のなんとかさんが、音頭をとって出発した。建物は、その頃、二軒、家を持っていたので、そのうち一軒を『文庫』に提供することになった」（誤植を訂正）と書いてあった。

『鎌倉文庫』の開設が「終戦後」というのは金田さんの記憶違いで、高見順の『日記』によると、戦時中の昭和20年５月１日に開店している。産業戦士に良書を提供すること、収入のなくなった作家を経済的に援助することが目的であったという。それはともかくとして、この『鎌倉文庫』の先例が、林達夫さんの頭のなかにあったことは間違いないだろう。伊東安兵衛さんは、のちに銀座で民芸の店「たくみ」の社長をやられた。「映画評論家のなんとかさん」は、林達夫さん

の近所にお住いだった南部圭之助さんのことである。

ところで、金田さんは、ご自分の家を提供して、貸本屋『湘南文庫』を開いたといわれるが、金田さんの家は小田急の本鵠沼駅から３分ほどのところにある。父上は「松月」という号をもつ書家で、お習字に通った人も多いはずである。

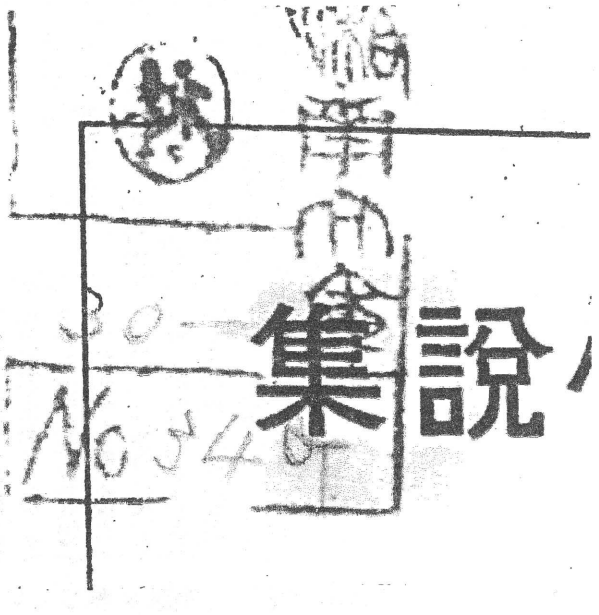
一方、木村さんは鵠沼海岸駅近くにあったといわれる。鵠沼に『湘南文庫』が二つもあったとは考えられなかったので、金田さんに「本鵠沼の文庫が、のちに鵠沼海岸のほうへ移転したということは、ないんですか」「それはないと思います。本を元の持ち主の皆さんにお返しして、閉店したように記憶しています」ということであった。

＊　　＊　　＊

二つの『湘南文庫』の出現に、だれか記憶している人はいないかと捜しているうち、決定的な資料が発見された。林達夫さんの二男、杲之介（こうのすけ）氏のスクラップ帳に当時の記事（昭和20年10月23日付東京新聞）が貼ってあったのである。それによると「本鵠沼及鵠沼海岸に貸本兼簡易図書館『湘南文庫』が開設を見」と書いてある（次ページ参照）。やはり二つの『湘南文庫』が存在したのだった。なお記事の「畑中正春、伊藤安兵衛」は「畑中政春、伊東安兵衛」が正しい。

この記事を読んで驚くことは、敗戦後４日目の「８月19日」に開店していることである。いかに『鎌倉文庫』に倣（なら）ったとはいえ、一億国民が呆然と虚脱状態にあったあの時代を思うと、これは想像を絶する素早さである。提唱者の林達夫氏は、当時の「日本を代表する知識人」であった。つとに敗戦を予見し、戦後の文化活動をあれこれ考えておられたのであろうか。のちに「鎌倉アカデミア」や藤沢の「夏期大学」に尽力されたことからも、それはうかがえる。

「五千余冊の蔵書が出本され」というのも驚異的で、大半は林達夫氏の蔵書ではなかっただろうか。本には「湘南文庫」の印が捺され（写真）、書籍番号の上に「３０－」「２５－」などという数字が記入されている。

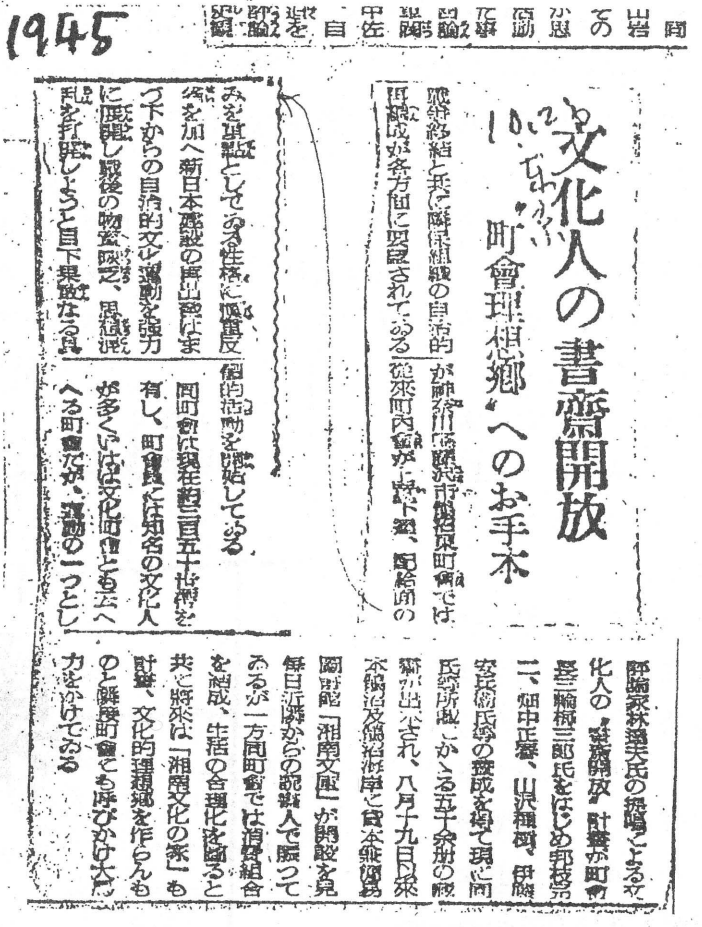


この数字は恐らく、貸し本の保証金の金額であろう。

高見順は『鎌倉文庫』開店前日の４月30日に「本は、保証金三円、五円、七円、十円、十五円、二十円、特別の七種に分けた。その分類は私がひとりで当った。千冊近い出品だからさすがにうんざりした」（『高見順日記』第３巻 P.421）と書いている。『鎌倉文庫』でさえ、のちに増えたかも知れないが、最初は「千冊近い出品」から出発したのであった。貸出料は一冊について「平均二十銭」だったという。

＊　　＊　　＊

敗戦直後の鵠沼の文化活動を伝えている記事を、ここに採録するとともに、本鵠沼と鵠沼海岸の二つの『湘南文庫』について、金田元彦さんと桑原玲子さんの貴重な証言を、以下に掲載する。桑原さんは旧姓大和田、鵠沼海岸駅前にあった大和田工務店（現・駅裏の大和田ビル）のご長女である。

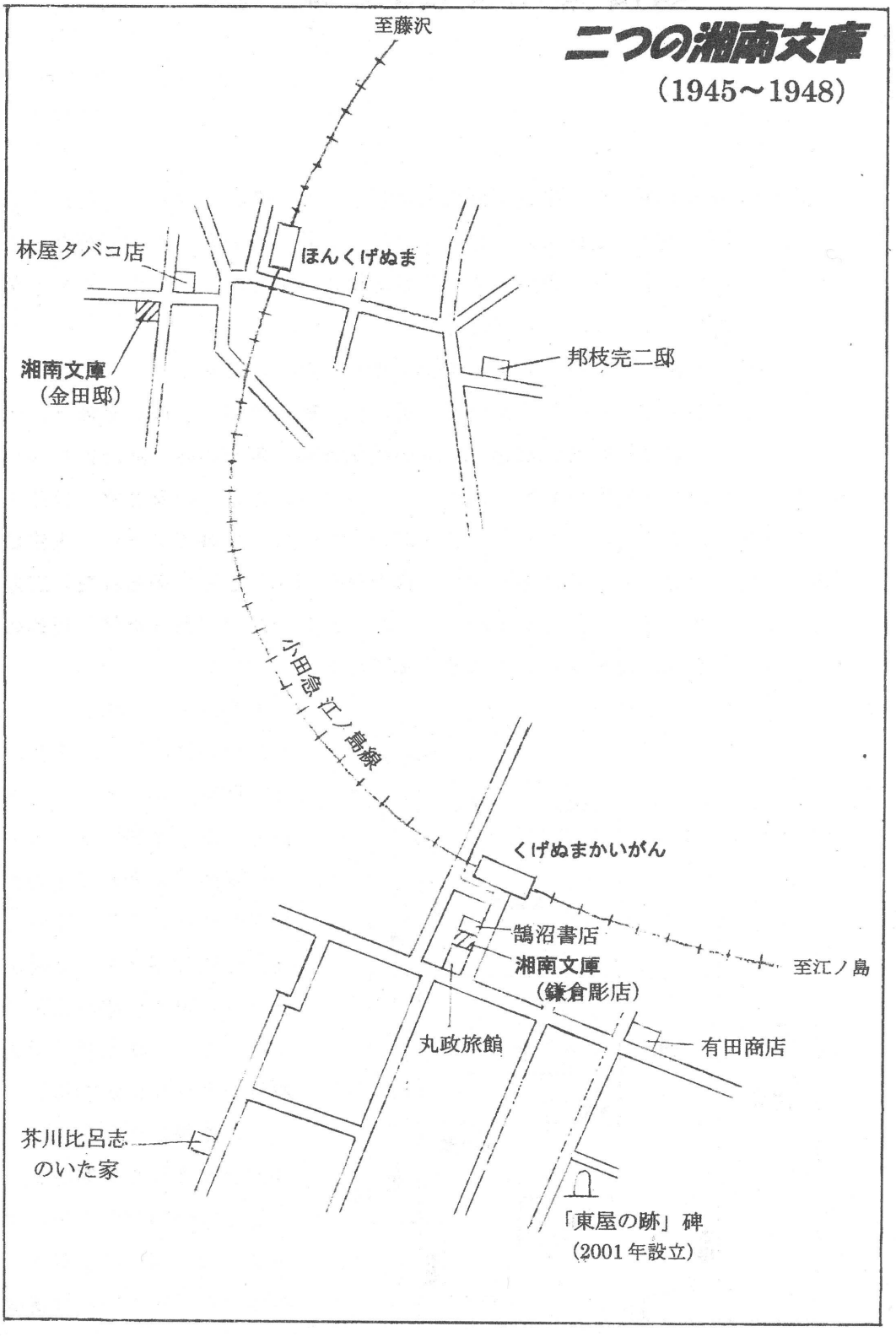


1945

文化人の書齋開放

町會理想郷へのお手本

『湘南文庫』の開設を報じている東京新聞（昭和20年10月23日付）

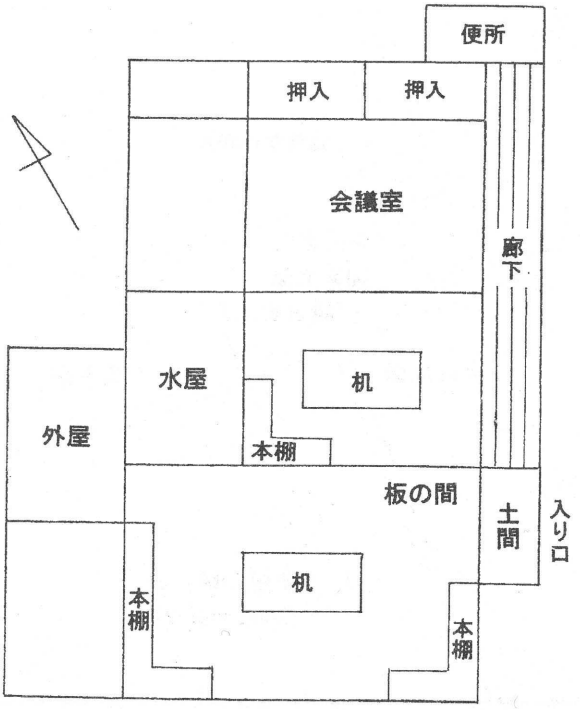

二つの湘南文庫
(1945～1948)
至藤沢
林屋タバコ店
ほんくげぬま
湘南文庫
(金田邸)
邦枝完二邸
小田急江ノ島線
くげぬまかいがん
鵠沼書店
湘南文庫
(鎌倉彫店)
至江ノ島
丸政旅館
有田商店
芥川比呂志
のいた家
「東屋の跡」碑
(2001年設立)

鵠沼文化史をかざる一齣

金田　元彦
（本鵠沼在住）

兵隊から帰って来たら、家が『湘南文庫』という図書館になっていた。その頃、私の家は、約 350坪の土地に、３軒の家（注）が建っていた。１．茅葺（かやぶ）きの家、２．トタン葺きの家、３．書屋（しょや）と称する稽古屋の３軒である。そのうちの茅葺きの家が、図書館になっていたのである。

その茅葺きの家は、恐らく明治の中頃に建てられた、農家であった。入り口からはいった所が土間で、それに続いて12畳の板の間があった。奥の座敷は、田の字になっていた。学生時代、友達と当時の武蔵野線（現在の西武池袋線）桜台にお住まいの和辻哲郎先生のお宅に伺ったことがあったが、その家と感じは似ていた。和辻先生の家の方が、バージョンが高かったのは、勿論であるが。先生は、友達から用件を聞くと、奥の部屋から、森田草平の本をもって来られた。二言、三言あって、我々は、すぐ引き下がった。たった２、３分であったが、当代の碩（せき）学に会った感激は、現在まで、こころの奥底にのこっている。



まあ、それは別として、入り口からはいって、正面の壁に一間半（90cm×３）の本棚があった。本棚には、岩波書店の講座『文学』『思想』などがあった。そのとなりに林達夫先生の『三つの指輪』があった。鴎外や漱石全集は、なかったが、横光利一全集があったような気がする。

この本棚の真向かいに一間（90cm×２）の本棚があった。そして板の間の真ん中には、一間（180 cm）の机があって、机の上に、いろいろな雑誌が

平積みしてあった。戦前の「中央公論」「改造」「どるめん」「コギト」「キネマ旬報」「現代」「文芸春秋」「日本評論」「女性」、そのほか、いろいろあって、たたみ一畳ほどの広さに、所狭しと、雑誌がのっていた。

座敷は、６畳・６畳・３畳・３畳になっていた。板の間につづいた６畳にも、一間の机があって、その上にも、雑誌があったと記憶している。６畳の片隅の本棚には、平凡社の『大百科事典』が、整然とならべられていた。奥の６畳は会議室として取っておいたらしい。東側の鴨居の上に、和紙に『湘南文庫』の同人の名が書いてあった。林達夫、邦枝完二、長谷川巳之吉、南部圭之助、伊東安兵衛、畑中政春、山沢種樹氏らの名があったはずである。

私が、もう少し勉強家であったなら、「中央公論」に、谷崎潤一郎の『細雪』を発見し、「コギト」の最近号に、三島由紀夫の『花盛りの森』を発見したはずだが、兵隊から帰ったばかりの私は、身体ばかり丈夫で、頭の中は、からっぽの２１歳の青年であった。当時は岩波書店で『文庫』が発売されると聞くと、たちまち行列ができるという状況であった。永井荷風の『踊り子』は、新聞紙のような紙に印刷され、読者が自分で、紙を折って、本をつくるというありさまであった。本らしい本が出たのは、仙花紙（せんかし）で出た坂口安吾の『堕落論』あたりが最初ではなかろうか。

そんな時代だったから、『湘南文庫』は、時流に乗って押すな押すなの人々で満員になるはずだった。ところが、一種の「武士の商法」は、目論みに反して、客はこなかった。毎朝、９時か10時頃、伊東安兵衛さんがいらっしゃって、土間に近い所に座蒲団をしいて、つくねんと座っておられた。一方、鎌倉の『鎌倉文庫』は、「貸本屋」として、かなり成功していたようである。

さて、この『湘南文庫』がいつまでつづいたか、はっきりしないが、昭和23年の３月に、東京大学から「入学許可」の通知がきた。そのときぐらいまでは、あったような気がする。私が兵隊から帰ったのが、昭和20年９月20日。そのときには、すでに『湘南文庫』は、開館していた。伊藤聖さんによると、その年の８月19日には、開いていたらしいのである。とすると、３年足らずの存続だった。

戦後、鵠沼の文化史をかざる、一齣（ひとこま）のできごとであった。

（注）『私の鵠沼日記』には、２軒と書いてあるが、それは書屋と称した習字の稽古屋が、このとき取り壊されていて、なかったからである。ここは、もともと鶏を飼うための小屋にするつもりだったので、粗末な造りになっていた。

お店で見かけた“お嬢さん”

桑原　玲子
（鵠沼松が岡在住）

戦争が終わった年、私は国民学校の５年生でした。そんな年齢の記憶というのは、おぼろげでありながらも、ある場面々々で、ばかにくっきりと、脳裏に焼き付いているものだと思いました。そんな記憶の糸をたぐってみました。

鵠沼海岸駅を背に、駅前の商店に向かって立って、右側にその『湘南文庫』という店は開いていました。もっとも私は、この『湘南文庫』という名称は、今度このお問い合わせをうける時まで、知りませんでした。

私の幼い記憶のひだには、戦争が終わって、しばらくたったある日、戦争中はずっと閉まっていた、鎌倉彫の石山さんのお店のガラス戸を開けて、その店先で“お別荘のきれいなお嬢さん”が、バケツにかがんで雑巾をゆすいでいた……そして「石山さんの家の人ではないけど、あの人が何か始めるのかな」と思ったことが、あざやかに浮かんできました。これが第一の場面。（この方が邦枝家のお嬢さんだったとは後から知ったのだと思います。本鵠沼の『文庫』は、戦後すぐの開店だったそうですが、鵠沼海岸のほうは少し遅かったように思います）

第二の場面は、鎌倉彫のお店の中。京都の老舗のように、間口の狭い、奥行が３間（５メートル余）くらいの店でした。なかは余り明るくないが、なんとなく落ち着いた感じでした。真ん中の通路をはさんで、右側には仕事をしながら店番をするようになっていたのか、小さな一畳ほどの畳のスペースがありました。左側は飾り棚だったと思います。そこに以前は、鎌倉彫のお盆や下駄などが飾られていたのでしょう。その棚に、本が沢山並んでいました。通りに面してショーウィンドーがあったような気がします。絵としての記憶はこれだけです。

そして私は、この『湘南文庫』のことを聞くまでは、このことを「戦争が終わって、小説家の邦枝完二さんが、暮らしのために、蔵書を貸すことをはじめた」（邦枝さんの関係の方、ゴメンナサイ）が、余り長くは続かなかった、とばかり思っていました。邦枝さんのお嬢さんが、お店番をされていたかどうか、その記憶はありません。評論家の室伏高信さんのお嬢さんも、当時は鵠沼にお住いで、お店を手伝っておられたということを、こんど初めて聞きました。

『湘南文庫』となった鎌倉彫の店は、現在の鵠沼書店の、向かって左隣です。そしてさらに左が、現在の丸政ビル。これも昔は丸政旅館といって、門かぶりの松をくぐって入っていくと玄関、という日本旅館でした。つまり丸政ビルと鵠沼書店の間にあった店が、『湘南文庫』となった鎌倉彫の店で、現在はサーフィン関連の店になっています。

『湘南文庫』のあった店（中央）と右は鵠沼書店

当時、鎌倉彫の店をやっていたのは、石山現三郎さんという老夫婦で、お子さんはなく、古屋さんという方を夫婦養子になさいました。古屋さんは、のちに、ここで「はまや」という食料品店を開いていました。その方のお子さんが、現在サーフィンの店をやっています。

ともあれ、私のおぼろげな記憶が『湘南文庫』に結び付いたとしたら、嬉しいと思います。と同時に、史実（ちょっとオーバーかな）は、沢山の事実の正確な積み重ねの中で考察されなければならないと思いました。なぜなら、のちに「鎌倉アカデミア」にまでつながる高邁な流れの中にあった『湘南文庫』を、ただの貸本屋さんとばかり思っていた私でしたから。

（2001年８月24日）

再録　鵠沼の林さん

芥川比呂志

『湘南文庫』について、編集も大詰めになった9月はじめ、会員の青木悠さんを通じて、林杲之介氏から「父の林達夫著作集付録月報(1971年)に芥川比呂志さんが湘南文庫のことを書いています」とのお知らせをうけた。比呂志さんは、鵠沼書店が『鵠沼文庫』という貸本屋を開いたというふうに記憶されているが、その貸本屋が『湘南文庫』のことであるのは間違いないので、その貴重な記録である月報を平凡社の許諾をえて全文再録させていただいた。この文章には、林達夫邸を訪ねたことや夏期大学(文化講座)のことも書かれていて、大変興味深いものとなっている。

(編集部)

林さんに初めてお目にかかったのは、敗戦の年、いや、次の年でしたか、いずれにしても戦後間もないころです。それから二、三年の間、お宅へはたびたび伺いました。

鵠沼西海岸[注1]から藤沢行の電車にのると、次の駅が本鵠沼です。降りて、線路を渡って、芋畑の見える道をしばらく行くと、松林が見えてくる。黒ずんだ木組の、白壁の西洋館が見えてきます。古い日本の農家を、よそから引いてきて、改造なさったのだそうですが、いかにも堅固な、すっきりとしたみごとな建物です。

「やあ、いらっしゃい」というのが、林さんの変らない第一声で、カーディガンを羽織っていらっしゃる時もあれば着物姿の時もあり、パイプを片手にという時も、眼鏡片手にという時もありましたが、かならず玄関まで出迎えて下さって、広い額、ほそい鋭い鼻梁、時に優しく、時に皮肉な、時にきびしい光を宿す眼に、微笑をたたえながら、独特の高い澄んだ声で「やあ、いらっしゃい」、それだけはいつも変りません。こちらは二十五か六か、繰上卒業で戦争へ行き、帰ったばかりの、いわば学生同然だったのですが。

当時私が西海岸に住んでいたのは、そこに母の実家[注2]があって、戦争中に「疎開」していたからです。東京の家は空襲にあって焼けてしまったので、当分鵠沼暮しと腹を決めていました。

じつはお目にかかる前から、この西海岸で、間接的にたいそう林さんのお世話になっていたのです。

西海岸の駅前に、文房具屋を兼ねた小さな本屋があります。それが貸本を始めました。あのころには、貸本屋というものがほうぼうにあったものです。本屋が貸本屋になるのはまだいいほうで、食料品や煉炭を売る本屋がめずらしくなかった時分です。なにしろ本のない、本の出しようのない時代でしたから。鵠沼文庫という名前だったと思いますが、違っているかもしれません、とにかく、その貸本屋にはずいぶんご厄介になりました。モウルトンの『世界文学』とか、児島喜久雄の『希臘の鋏』とか、フェレンツ・モルナールの戯曲集とか、二、三冊借りて読んでは、返しに行ってまた借りてくるというふうでした。

それが、林さんのご本だったのですね。お宅へ伺うようになってから、「あまり借り手のない本ばかり借りて行く人があるので、貸出簿を見たら、あなただった」と、笑いながらおっしゃったことがあります。

当時鵠沼には、林さんや、加田哲二さんや、第一書房の長谷川巳之吉さんなど、学者や知識人の方々の有志の集りがあり、その集りが主催者となって、青年たちを対象とする一連の講座を開いたことがありました。文化講座だったか、夏期大学だったか、これも名称についての記憶があいまいで、まことに申しわけがないのですが。

その講座のなかへ、演劇についての講義の付録という形で、みじかい芝居の上演を繰り入れようという案が出たらしいのですね。長谷川さんのご子息の哲三さんを通して、何かやってみないかというお誘いを受けました。哲三さんは大学の二年先輩で、戦前、昭和十六年に、私が加藤道夫といっしょに「新演劇研究会」という学生劇団をつくり、ポール・グリーンだの、ジュール・ロマンだの、モリエールだの、時勢にそぐわない芝居をぽつぽつと上演していたのを知っておられたのでしょう。

このお誘いは私たちにとっては、驚天動地の出来事で、いや、大袈裟でも何でもなく、私と「復員」したばかりの加藤とは、その鵠沼の小学校[注3]で芝居をしたものかどうか、真剣に論じ合ったものです。何しろ、私たちの傾倒したベルグソンの『笑』[注4]の翻訳者に、林さんに見られてしまうことになるのですからね。

結局、私たちはこの面はゆい仕事を引きうけました。演目はチェーホフ作、米川正夫訳の『熊』主人公の退役軍人スミルノフを加藤道夫、若い未亡人を加藤治子、私は演出をしながら老僕の役を演じました。

じつはこの芝居が、林さんと直接お目にかかるきっかけになったのです。林さんは、文字通り汗顔の至りの学生芝居を演じた私たちを、大いにはげまして下さって、「遊びにいらっしゃい」と声をかけて下さった、それが、お宅へ伺う機縁になったのでした。

天井が高く、広い空間を領した沈静な趣きのある林さんの書斎に入ると、急に、話すことがなくなってしまうような不安に捉えられるのが常で、用意してきたはずの話題が、ほとんどみな、ここでは場違いのように思われ出すのが不思議でした。黒い光沢を帯びた床や、きちんと本の並んだ余り大きくない書架や、清潔な白布に蔽われた休息用のベンチレットや、そういうものの中に坐っていると、何だか自分がひどく痩せた、頼りない存在に思われてくるのです。ここは本質的な、もっとも本質的な事柄についてのみ語る場所だという気がしてきて、二言三言しゃべると、もう何もしゃべることがなくなってしまう。眼の遣り場に困って、庭の灌木の茂みを眺めていると、林さんは相変らず微笑を浮かべながら、いつもの澄んだ声で、

「手入れをしないものですからね、茂り放題です。前に、シェイクスピア・ガーデンを造ってみようかと思ったことがあるんだけど、どうもね」

「はあ、ヒースとか、勿忘草とか、柳とか、薔薇とか……」

思い出すままに、曲もなくシェイクスピア劇中の植物の名を並べたてるのが精いっぱいという有様ですから、折角の助け舟も役に立たず、うなずきながら微笑していらっしゃった、あれはじつは苦笑していらっしゃったに違いありません。

かくてはならじと勇を鼓して、ルイ・ジュヴェの演技について一席論じると、林さんはにっこりしながら立ち上がって、机の上から原書を一冊とりあげて戻っていらつしゃる。

「ぼくも今、読んでいるんですよ、これ」

ルイ・ジュヴェ著『役者の考察』です。うなだれたくなる気分でしたね、あの時は。

私はまだ、林さんが、かつて演劇に情熱をたぎらせた一時期のあったことを、迂潤にも、知らずにいたのです。

そんなつらい思いを重ねながらも、林さんの書斎へ、惹かれるようにして通ったのは、当時私が、芝居の実際の仕事に入ろうか、それとも書斎にとどまろうかと、思い屈していたからだと思います。ごく僅かながら、自分の中に形造られてきた演劇というものの像と、日本の現実のそれとの食い違いを、どう始末したも

のか、思案がつかないままに、お宅へ伺って、林さんにお目に掛っていると、そういう苛立ちが消えてくるのです。さて帰ってくると、どうも感覚的な言い方ですが、自分の中で、何か発条[注5]のようなものがいっぱいに捲き上げられているような感じになっている。書斎行、劇場行、両方の発条が、両方ともに。ここが難しいところでした。林さんの芝居の話は、本質論から、現代日本の新劇の、いわゆる名優たちの演技評に至る、あらゆる話題に及んでいましたから。

林さんが三木清について書かれた文章のみじかい一節が、どういうわけだか頭の隅にこびりついて、何かの折にふと浮かんできます。「……夢の中の長い疾走であった」という、ただそれだけの文章なのですが。

芝居の実際に携わって以来二十何年、相変らず覚束ない仕事をつづけていますが、林さんに頂いた二冊の『ヴィユゥ・コロンビェ座の手帖』叢書、ゴーゴリの『結婚』とコポーの『生れた家』の表紙をながめ、そこに黒いインクで書かれた「はやしたつを」という署名をながめ、あの頃のことを、あの書斎の緊張を想い出すと、「……夢の中の長い疾走であった」という例の一句が、ごく自然に浮かんでくるのです。

注1　ここの「鵠沼西海岸」は「鵠沼海岸」のことである。戦後、小田急では「鵠沼東海岸」駅の新設を計画したこともあるが、それとは関係ない。

注2　芥川龍之介の妻(比呂志の母)文さんは、昭和19年6月「鵠沼西海岸五五〇一」(現在は鵠沼海岸3丁目)に比呂志の妻瑠璃子さん、孫たちと疎開、ここを比呂志は、母のいた家という意味で「母の実家」とよんでいる。(本誌11ページを参照)

注3　この「鵠沼の小学校」は「湘南学園」のことと思われる。

注4　ベルグソンの『笑』(林達夫訳)は「岩波文庫」★★で、昭和13年2月に出版されている。

注5　「発条」は「ばね」とよむ。スプリングのこと。

米軍撮影の航空写真について

伊藤　聖（会員）

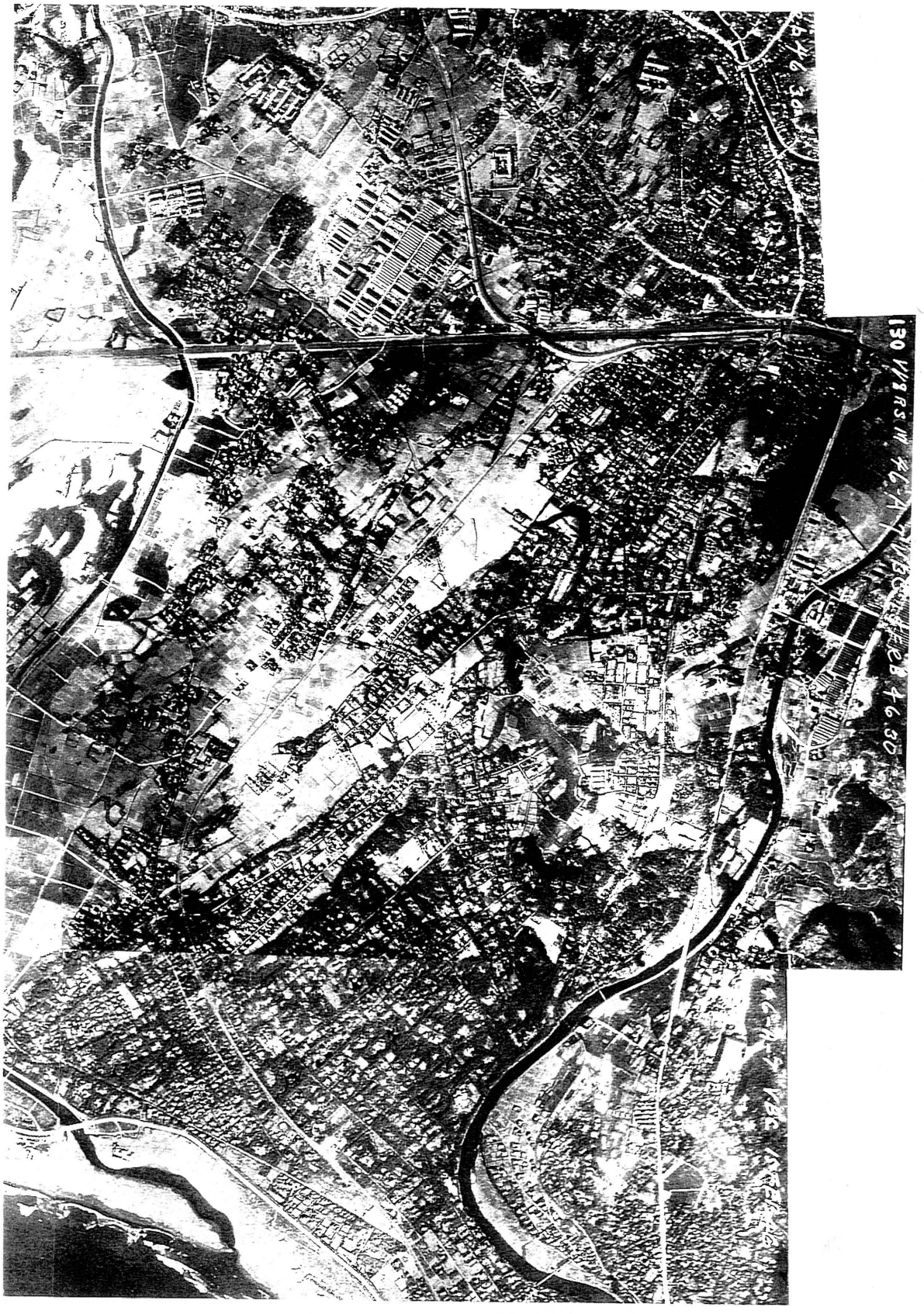
敗戦直後の1946年（昭和21年）から48年（同23年）にかけて、米軍は占領政策のため、日本全土にわたって縮尺４万分の１と、一部密集地を１万分の１の航空写真（正式には空中写真）で撮影した。現在、その原版は、筑波市の「国土地理院」に移管されているが、手続きをすればそれが「日本地図センター」（東京都目黒区青葉台４－９－６ TEL 03-4385-5411 ）で実費で入手できる。今回、鵠沼地区の航空写真を手にいれたので、これについて書いておきたい。

写真原版は（22.5 ｾﾝﾁ×22.5 ｾﾝﾁ）の大きさであるが、今回入手したものは、それを２倍に拡大した写真（ 1,950円）と、３倍に拡大した写真（ 3,750円）の２種である。３倍写真で、縮尺は１万３千分の１ほどになるから、一軒々々の識別が可能である。右ページの写真は、２倍写真を半分以下（33%）に縮小、さらに南北を別の写真によって補い、鵠沼の全景が含まれるようにしたものである。

写真の右側に「130 V V 8 R S M 46-A-7 V B C 15 Feb 46 30 」という記号が記されている。「130 」は写真番号で、これが写真を申し込むとき、一番必要になる。最後のほうの「15 Feb 46 」は撮影年月日で、この写真が、1946年２月15日に撮影されたことを示している。時間は午後らしく、家屋の影が写るように配慮されている。そのほかの記号は、部隊名や写真データである。

撮影は、高度２万フィート（約 6100 ﾒｰﾄﾙ）で行われ、真東から真西へ飛行しながら、次の番号「132 (131はない）」とは、60%ほどオーバーラップするように撮られている。「132 」には辻堂の東半分が写っている。また、これより北の飛行コースの「80」と、南の「65」とは、それぞれ「130 」と40%ずつ重なっている。「80」には、旧制湘南中学（写真の上のほうにみえる）から、現在の荏原製作所のところにあった旧海軍厚木航空隊の飛行場までが写っている。

戦後間もない鵠沼の航空写真であるが、戦前は人口の増加もゆるやかだったので、大正から昭和にかけての鵠沼の面影が色濃く残っているといっても差し支えない。前の『鵠沼』82号で関根久男さんが、小田急で「鵠沼海岸あたりまでくると見渡すかぎり松林ばかり」と書いているように、鵠沼はすっかり松林のなかに埋まっている。その小田急も、戦争末期の単線運転のままで、片側（上り線）のレールしか写っていない。みていると、いろいろ新しい発見がありそうである。



この米軍撮影の空中写真は国土地理院の承認を得て掲載しました。

広田家　鵠沼を去る日

―風雪を耐えぬいて60年―

鈴木　三男吉（会員）
有田　　裕一（会員）

会員の有田氏から「広田さんが７月24日に東京へ移ることが決まったそうです」と知らせて下さったのが、その数日前のことでした。

A級戦犯として文官ただ一人死刑の判決を受け、弁解は一切せず従容として死についた広田弘毅氏のご家族が、鵠沼に住まっていられる以上、「語る会」として一度ぜひお目にかかりたいと思っていたからです。翌朝すぐ電話してみましたが、お身体の不調ということでお会いできず、やはり電話だけのお話に終わりました。広田家といっても現在では、弘毅氏の三男正雄氏の夫人厳水（いずみ）という方ただお一人になってしまいました。この方とは以前にも一度電話でお話したことがあり、そのときは、終戦直前のころ近くの松林の中に機関銃が発見されたり、低空飛行による銃撃をうけ今でも家の中に弾痕が残っているなど、いろいろお話をうかがうことが出来ましたが、非常に鄭重な物静かな言葉のなかにも何か無念さがこもる思いがしました。

二・二六事件の直後、首相として軍部暴走の後始末を任され（昭和11年3月）、懇請に懇請をうけて就任した第一次近衛内閣（昭和12年6月）の外相もわずか１年で宇垣一成と交代し、政治の第一線から退き、重臣の座に据えられた文官の広田氏が、まさか極刑になるとは、誰しも考えませんでした。ご家族の無念さのほどがわかります。当時の旧憲法では統帥権（軍隊の最高指揮権）の独立が規定され、軍の方針に文官人が容喙すれば、たちまち統帥権干犯として逆襲される時代でした。

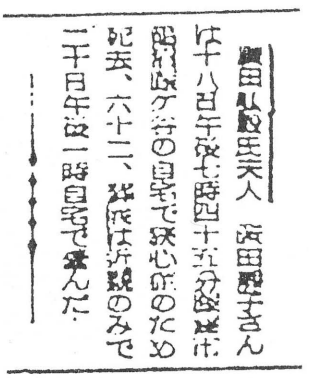
そもそも広田氏が鵠沼に別荘を持たれたのはソ連大使在任中（昭和５年～７年）のことで、静子夫人の遠縁に当たる方（帝国興信所の後藤家）の紹介であり、この方の別荘にはそれ以前から度々行かれていたそうです。広田氏は鵠沼がたいそう気に入り、ソ連から帰国したら引退して、日本の行く末を眺めながらここで静かに余生を送ろうと考えていらしたようです。相次ぐ軍部の暴走はこの夢をはかなくも砕いてしまいました。ソ連から帰国したあとしばらく鵠沼で静養されていましたが、五・一五事件（昭和７年）の直後に成立した斎藤内閣の外相（内田康哉辞任のため）に懇望され、再三の固辞にもかかわらず就任することに

なり（昭和8年9月）、新しく原宿に家を求め、鵠沼を去ったのです。ここから広田氏の運命が大きく変わったと言えましょう。

そして最後の鵠沼滞在となったのは、昭和20年5月25日の東京大空襲によって原宿の家が全焼し、一家をあげて着の身着のまま鵠沼にたどりついたときです。次女美代子、三女登代子、三男正雄夫妻の６人でした。ちょうどこのとき広田氏は、ソ連の参戦を阻止し、できれば和平に繋ごうと密かにソ連要人と交渉を行っていました。それが軍部に漏れ、鵠沼にこられた広田氏は、前に述べたように軍部に狙われる身になったのです。この時分には鵠沼も昔と違って疎開者などで住民も増え近所の人々に迷惑がかかる恐れもありました。そこで警察は広田氏に転居を願い、広田氏一家は練馬の知人安部十二造氏宅へ移られたのです。8月15日を過ぎた8月20日だったそうですが、これが広田弘毅氏にとっては鵠沼の見納めとなりました。

この年の12月2日に発表された戦犯逮捕命令には広田氏も含まれていました。さらに6日には近衛、木戸などの逮捕命令が出されましたが、近衛は逮捕前に自殺をとげました。これによって広田氏の命運は決まったと言えましょう。あるいは自らの命運を決めた、と言った方がより適切かも知れません。検事団の取り調べが終わり極東国際軍事裁判が開廷されたのは翌年の5月3日のことでした。それからしばらくして鵠沼から悲しい知らせが届きました。静子夫人が自ら命を絶ったという知らせです。

5月17日、正雄氏、次女、三女の三人で法廷の傍聴に行き練馬の家に帰り、しばらく休廷になる話などをされたところ、静子夫人は、今日はどうしても鵠沼に帰るといい、5人で鵠沼に帰ってこられました。そして夕食をとり、床についた翌朝、すでに息を引きとっていらしたそうです。広田氏との面会は5月14日が最後でしたが、このときすでに裁判の見通しをつけ決意されたものと思います。このことはすぐに米軍から広田氏に伝えられましたが、詳しいことは初七日の日に正雄氏が面会に行き直接伝えたそうです。その時広田氏は一言も発せず大きく頷いただけだと言われています。お二人の間にはすでに近衛、木戸の逮捕発表、近衛の自殺の頃から、互いに相通ずるものが出来ていたものと思われます。静子夫人は、自由民権の志士で、のちに玄洋社の幹部となっ


廣田弘毅氏夫人　廣田静子さん
は十八日午後七時四十五分鵠沼
海岸ゲ谷の自宅で狂心症のため
死去、六十二、葬儀は近親のみで
二十日午後一時自宅で営んだ

『朝日新聞』
（昭和21.5.21）

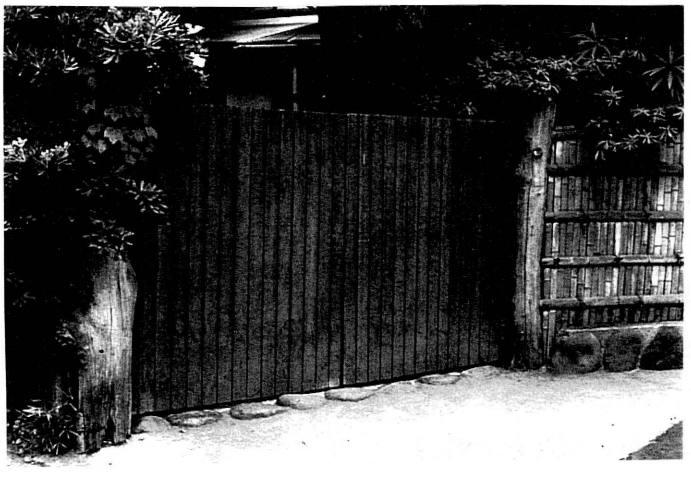
た月成功太郎の娘で、弘毅氏とは幼馴染みで相思相愛の仲だったそうです。新聞には3日後の5月21日に狭心症による死として報道され（前頁写真参照）、7年後の追悼会の席で初めて長男弘雄氏により自殺であったことが公表されました。

広田弘毅氏が静子夫人の後を追うことになったのは、それから約二年半たった昭和23年12月23日でした。静子夫人が鵠沼で自殺されてから、次女美代子、三女登代子、そして三男正雄、同夫人厳水の四人は練馬を引き払い、再び鵠沼の別荘に寂しく住んでいられました。かねて覚悟はされていたものの父上が亡くなったこの日以降、どのような気持ちで毎日を過ごされたでしょうか、推察する言葉もありません。父弘毅氏の信条とした「自ら計らず」を同じく実践し、人に迷惑をかけないよう静かに慎ましく暮らしていらしたようです。そして5年前まず三男正雄氏が亡くなり、続いて次女、三女が亡くなり、最後に正雄氏の夫人お一人となったのです。

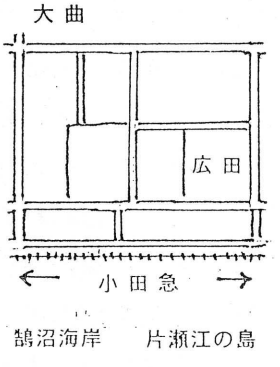
厳水夫人は予定どおり7月24日、江の島発の小田急ロマンスカーで鵠沼を去り、東京のお妹さん宅へ移られました。ちょうど鵠沼海岸駅と片瀬江ノ島駅との中程にある自宅の方に目を移し、別れを告げていらしたそうです。

【追記】本稿を書くに当たり『広田弘毅』（広田弘毅伝記刊行会、昭和41年）、城山三郎『落日燃ゆ』（新潮社、昭和49年）、北川晃二『黙してゆかむ』（講談社、昭和50年）を参考にしました。城山氏、北川氏の著書は現在それぞれ新潮文庫、講談社文庫になっています。

また本誌『鵠沼』30号に富士山氏（医師、元会員、故人）が、鵠沼の広田弘毅氏を往診した時のことを書いていますが、広田氏の人柄がよく描かれています。ここでは、次男と妹の家ではないかとされていますが、次男忠雄氏は学生の時に亡くなりました。



← 広田邸正門



夢の中で走った江ノ電

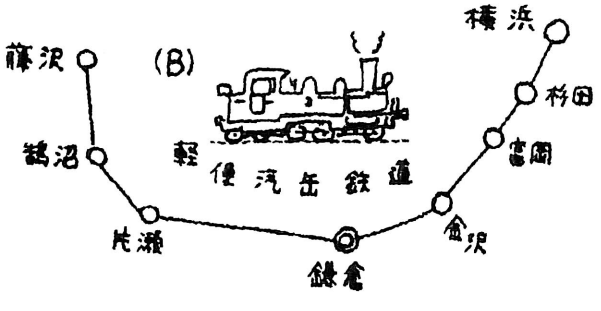
青　木　　悠（会員）編

鎌倉江の島を訪れる観光客は必ずといっていいほど「江ノ電」に対し何らかのイメージと期待を寄せている。まして「江ノ電」に初めて乗車した人たちは家々の軒の間を潜り抜けたかと思うと道路の真ん中を自動車とすれ違いながら走る姿に子供ならぬ大人まで歓声をあげる。そして相模湾のヨットや江の島や箱根の景色にしばし時を忘れる。この可愛い電車も明治35（1902）年9月1日藤沢―江の島間に日本で6番目の電気鉄道として産声をあげてから來年で１００歳を迎える。

時事新報によると、開通初日に鵠沼付近［藤ヶ谷、今の奥山獣医の近くのカーブ？］で3回脱線、そのうえビューゲルが架線を切断し遂に進行不能のスタートであった。（しかし、9月3日の東京朝日新聞によると1日の午後5時20分鵠沼を発車した下り電車と上り電車が百里山の急カーブで衝突し、多数のけが人が出たと報じている*1。）とにかく江ノ電はいろいろなエピソードと夢のような新企画をもつた電車であったことは余り知られていない。今回はその夢の江ノ電の企画を集めた記事を**「ふるさと風物伝承研究会」**代表**すわまさよし氏**のご了解のもとに**「日本の風物と伝承シリーズ44号」**より転載・編集し紹介することにした。（編者記）

1.「江ノ電」の起源と開通まで

明治28（1895）年といえば、日清戦争後の下関条約調印の年だが、京都に日本初の市街電車が開通した年でもあった。明治20年代は好況で東海道線が全通り碓氷峠にア



*1 江ノ電沿線新聞平成13（2001）8.1号佐々木寛氏の「江ノ電初代社長青木正太郎」より、なお文中に「百里山」とあるが「百両山」の誤りではないか

プト式鉄道ができたり、鉄道界でも第２次建設ブームといわれる時代に入っていた。

この年の８月３日、発起人若尾逸平らによって「鎌倉電車鉄道株式会社」（A）が、続いて 10 月３日には、松平直己らによって「鎌倉鉄道株式会社」（B）が競合して敷設免許申請を神奈川県知事経由で逓信大臣（今なら国土交通大臣）に提出した。Aの路線は、横浜（黄金町）― 鎌倉 ― 七里ヶ浜 ― 片瀬（江の島）― 藤沢、BはP.1の図のようであり、横浜（官鉄の桜木町駅のところ）から鎌倉経由[*1]で片瀬・藤沢に至る点はよく似ている。しかし、最大の相違点は、Aの鉄道の動力は社名のとおり「電気力」であるのに対して、Bは、蒸気の力即ち「汽力」であって、いわば軽便汽缶鉄道と呼ばれるものであった。

（写真）山本庄太郎氏
代々、名主の家柄、区長・村議・県議・郡長を勤める。上・下の山本橋を自費でかけた。江ノ電の歴史に深くかかわる。

続いて翌２９年になると、これとは別に福井直吉らによって、２月１４日電気鉄道敷設願（C）が出された。福井直吉は大住郡豊田村（現平塚市）の人で、この計画はA.Bとは違い、経過地は藤沢大坂町（明治２２年大久保町と坂戸町が合併してできた名称で、今の藤沢駅付近を含む町名）― 川口村（明治２２年　鎌倉郡江島・片瀬村が合併して誕生）及び腰越・津村 ― 鎌倉とあって、今の江ノ電とほぼ同じ軌道となっている。

これ（C）に対して、川口村会で山本庄太郎議員が先ずこの敷設に異議を表明、村議会の反対するところとなった。

〈競合申請その後〉

（A）…… 横浜 ― 鎌倉間を削除、鎌倉 ― 藤沢間のみならよいと鉄道局より指示されたので、区間短縮再申請の結果、明治 30 年 12 月認可状が交付された。

---

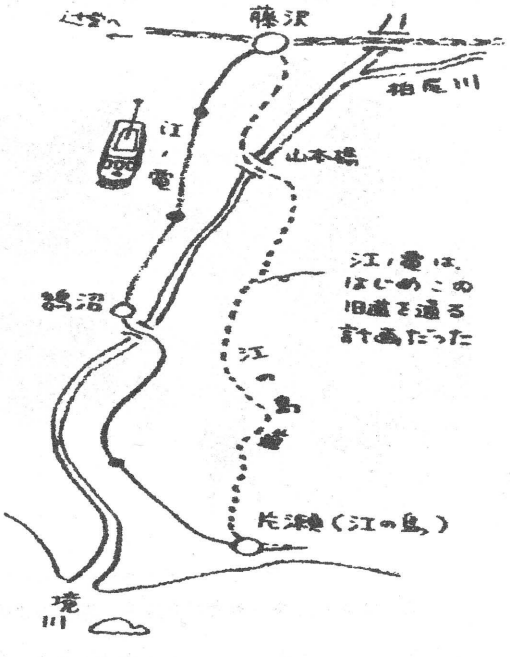
*1 大船からは明治 22（1889）年に横須賀線が開通しているが、この線は、当時軍事輸送が主目的で、旅客輸送は二の次であったために、外国人の利用は制限され、日本人も利用しづらかった。だから藤沢から鎌倉、更に横浜間に鉄道を建設すれば繁盛するのは明らかであった。

（B）……　（A）と同様、鎌倉　―　藤沢間のみに変更して再申請の結果、明治31年1月14日仮認可されたが、着工せず敷設免許を返納してしまった（明治32年8月1日）。なぜ免許を返納したか、詳細は不明であるが、恐らく、両者による蒸気車と電車との利点・欠点等の論議の結果によることが考えられる。

（C）……　地元川口村の反対にあったので敷設申請は一度は却下されたが、明治31年12月20日付で電気鉄道敷設の仮免許を受けている。

さて、ここで（A）と（C）の同じ電気鉄道同士の競り合いとなった。両者とも認可されているので異例のことでもあった。恐らくこの2社は最終的に何らかの協定を結んだのではないか、詳しいことはわからない。

〈「江ノ電」をどこに通すか〉



明治29（1896）2．19福井直吉らにより出されていた電気鉄道敷設願に対する内容の審査をするため、川口村村会が開かれた。県知事からの依頼によるものだった。議事録による山本庄太郎議員の発言は次のようなもので、村会は満場一致でこの発言に同意し、県知事に答申した。

『藤沢―川口村―腰越（津村）―鎌倉間の鉄道敷設については、既に鎌倉鉄道会社が創立され認可がでているので（A・Bのこと）、それ以上電気鉄道を敷設する必要はない。当村に鉄道を敷設する事は、村会として希望するところであるが、今ある道路上へ電気鉄道を通すとなると、道がせまいから、交通上害を及ぼすことになり同意できない。』

明治29. 6. 13再び県知事から村会へ諮問があった。「道路がせまいので交通上危険ということだが、それならば、今の道路を幾尺迄広げれば危険なしと認めるのか、村会の意見を聞きたい」と。これに対し3日後の6. 16　川口村会は知事に答申したが、

この中で山本庄太郎議員は概ね次のように述べている。

『本村地内仮定県道になっている江の島鎌倉往還[*1]は道幅が２間（3.6m）であるが近来年毎に交通がひんぱんになり、今でも道幅の狭いことを痛感している。ここに鉄道を敷設することは危険というより到底不可能のことである。この道幅を拡張して、そこに鉄道を敷くとすれば、沿道にある家屋はすべて移転しなければならず、その替地が無ければ居住に困り、不幸を招くおそれがある。替地とそこへの移転ができるようにならなければ本村の利益の上からやむおえずこの敷設には同意できない』[*2]村会は満場一致これに同意した。このため敷設申請は一度は却下されたが、発起人等の粘り強い再申請によりようやく明治 31（1898）12. 20 敷設の仮免許がおりたのである。旧道江の島道を通さず、その代替案について地元との何らかの契約ができたのであろう。

江ノ電をどこに通すかということは多くの人の関心を呼んだ。中でも当時交通の中心的役割を果たしていた多数の人力車夫達は死活問題であるとし、絶対反対を唱え、妨害戦術に出たことはよく話題にされた。その結果、既存道路上を通らず大地主所有の道なき原野・松林を切り開き、曲がりくねって開通した……といわれる。しかしそれ以上に沿道住民の立場で議論を重ね、県側と対応して行ったのが地元川口村の村議会であったことを忘れてはなるまい。また後に江ノ電開設に一役買った山本庄太郎議員の存在と活動は特記すべきことだと考える。彼は電気鉄道の利便さには充分理解を持っていた。

江ノ電開通前人力車で観光客を運ぶ。龍口寺前の風景（明治２１年頃）右手前は上州屋　「地図に刻まれた歴史と景観」所載

---

*1 いわゆる旧道、古道の江の島道を指す。往還は往き帰り、行き来する道のこと。

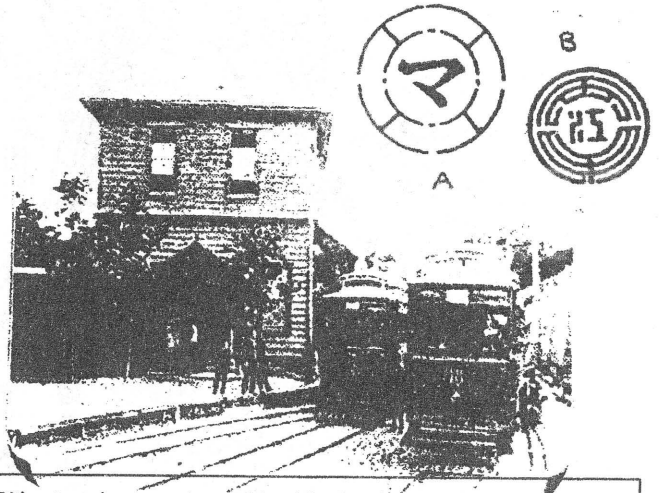
*2 『　』内は山本庄太郎議員の発言要旨　（藤沢市史　第三巻による）

〈江ノ電　会社創立〉

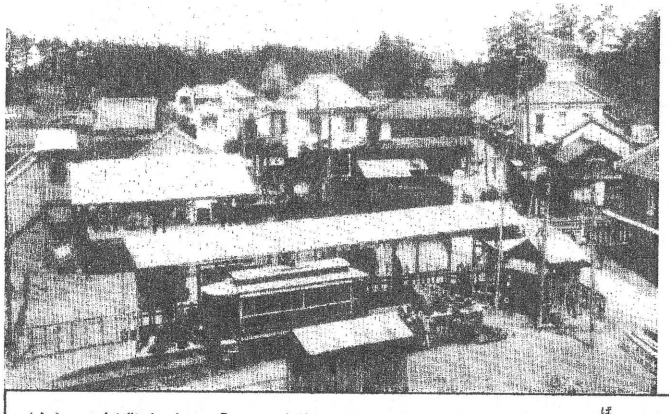
上記Cの福井直吉らの流れをくんだ「江之島電気鉄道株式会社」が明治 33（1900）11.25 設立するに至った。100 年以上前のことになる。

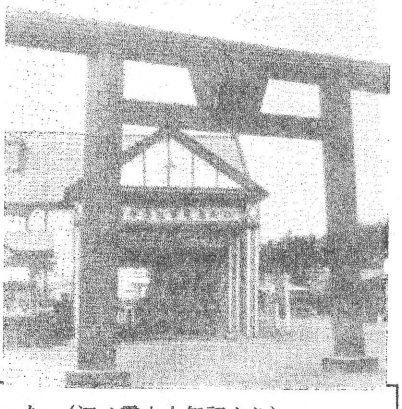
資本金は10万円とも20万円ともいわれていた。取締役にCの電気鉄道の発起人だった前記、福井直吉と川口村会議員（のち村長）で、はじめ旧道への敷設に反対した山本庄太郎らが同じ会社に納まっているのは、注目すべきことである。

路線工事は、明治 34（1901）



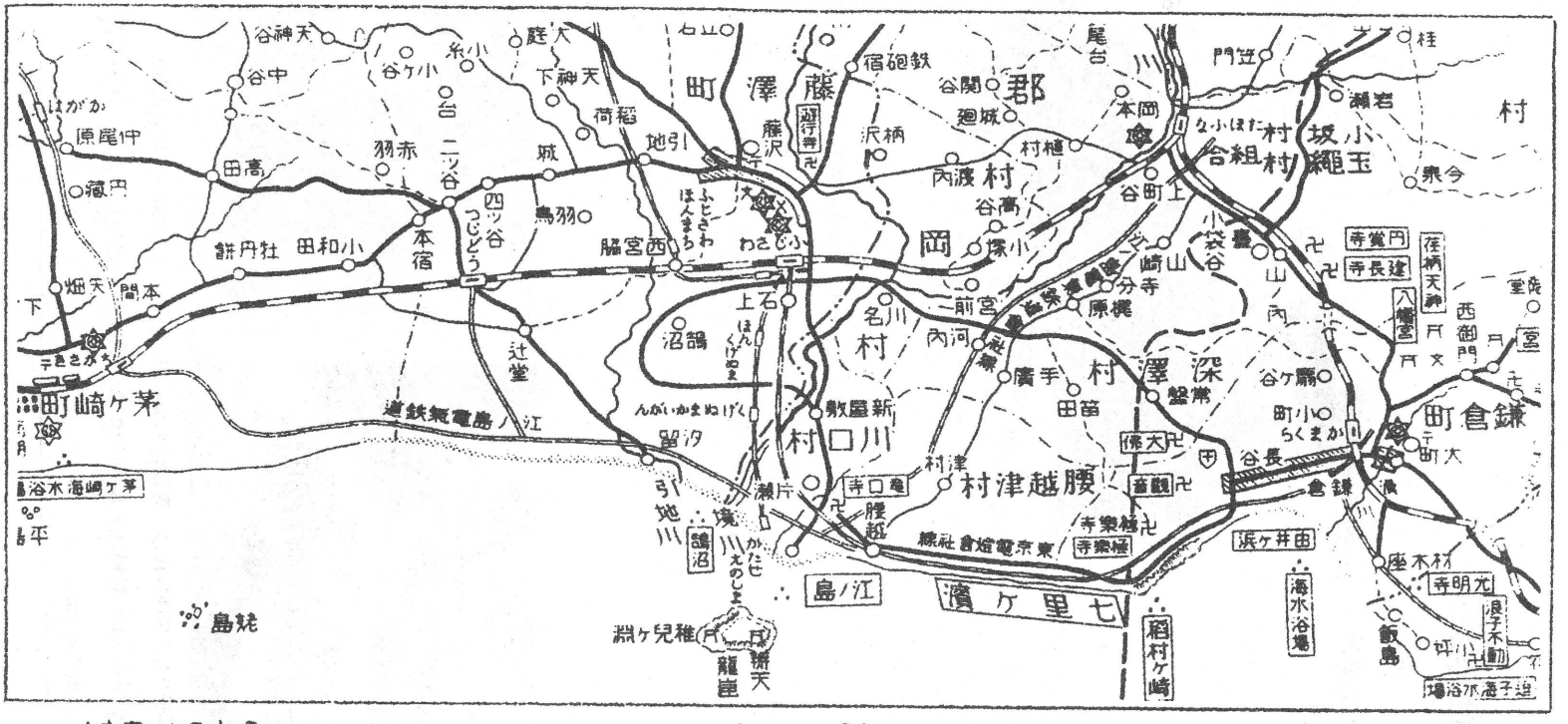
明治 45～大正 12 年（震災前）（１９１２～２３）の江の島駅（当時片瀬と呼んでいた）左側は本社屋、この先に龍口寺がある。左の線路は貨物線と思われる、（湘南再発見　江ノ電沿線新聞社所蔵のもの）右上のマーク A は、創業時の（江ノ電）マークで、「エノ」が四つ、真ん中に「マ」これで「江ノ四マ」と読ませた。B は現在のもの。





（左）は創業当時の「江ノ電藤沢駅」明治時代は「藤沢停車場（ば）」といった。（江ノ電六十年記より）

（右）は初代江ノ電藤沢駅前に建つ江の島神社の鳥居明治 38（1905）年巳年にあたり「江の島神社巳年大祭」に奉納した鳥居　（江ノ電六十年記より）

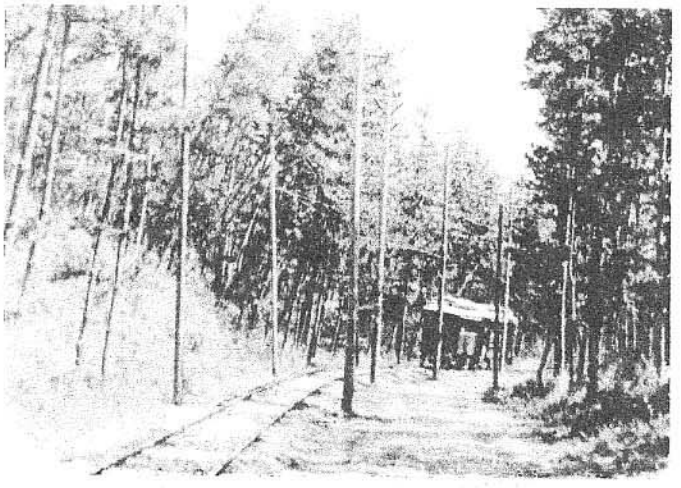


神奈川県交通地図　昭和4（1929）8.10発行　東京日日新聞社　（筆者所蔵）

新線計画が盛んだった頃の交通地図で、江ノ電既設線は、東京電燈会社線と名付けられている。明治33（1900）年発足した「江ノ島電気鉄道株式会社」は10年後、横浜電気株式会社と合併、のち大正10（1921）年横浜電気㈱は東京電燈株式会社と合併したから、その当時の名前が使われたのであろう。計画路線 ═══ は、江ノ島電気鉄道とあり、昭和3（1928）年東京電燈㈱から再び分離独立した「江ノ島電気鉄道㈱」の直営になっていることを物語る。今の名は「江ノ島電鉄株式会社」（地図地名は右横書き）

年6月起工、明治35．9．1藤沢大坂町―川口村片瀬間3.4Kが営業開始となった。敷地の大部分は山本議員の所有地だったとされ、人力車夫の失業問題も江ノ電に再雇用の道が開かれたと伝えられ、反対は徐々に収まっていった。

ここに江ノ電は日本で6番目、関東地方では3番目[*1]の電気鉄道となったのである。現在のように藤沢―鎌倉（当時、小町）間全通は明治43（1910）10．30のことであった。



鵠沼の松林（鵠沼と柳小路の中間、百両山付近）を走る江ノ電

2．新線計画のあらまし

大正から昭和（1920～1930ごろ）にかけて京浜―湘南間にまき起こった鉄道建設ブームの中で「江ノ電」も又、自ら江の島（片瀬）を中心に新しい路線計画を持っていた。

（1）　茅ケ崎・辻堂・鵠沼線……（P.42の図）この計画は、

大正11（1922）12．22江ノ電の前身だった「東海土地電気株式会社」名義で出願・認可されたもので、勿論、電気鉄道である。計画路線は、

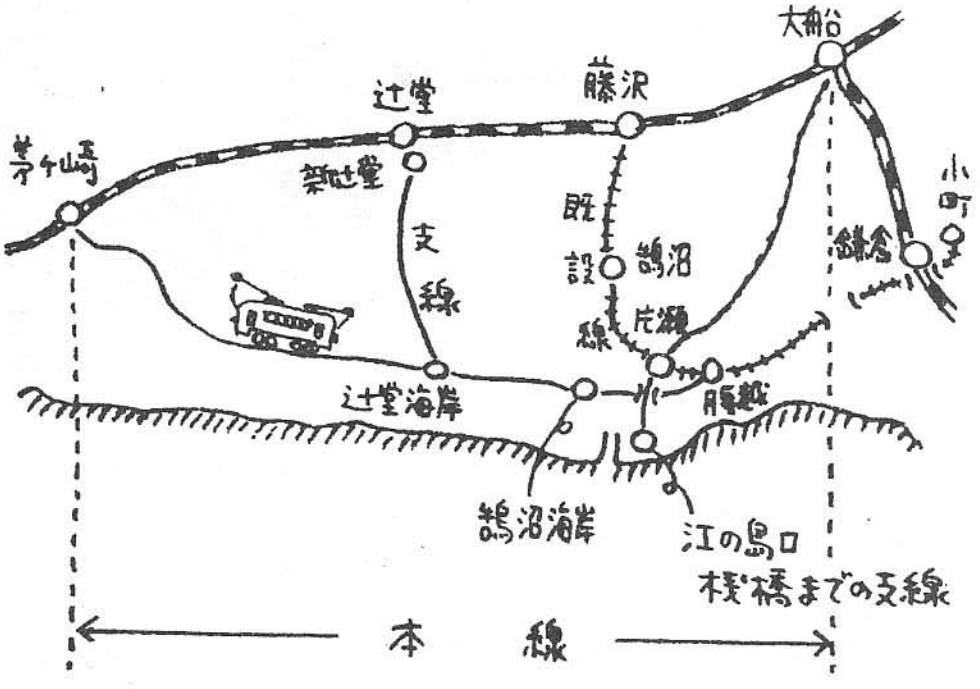
大船―鵠沼―辻堂―茅ケ崎　　に及ぶものであり、1部着工もしていたが、このうち次の二線部分が具体的に記録に残っている。

茅ケ崎町―藤沢町鵠沼（海岸）　4.61マイル（7.42K）
藤沢町辻堂―辻堂海岸　　0.77マイル　（1.24K）

この二線の建設費は50万円だった。

---

*1 大師電気鉄道（現、京浜急行電鉄）明32.1.21 六郷橋―大師間、小田原電気鉄道　明33.3.21 国府津―小田原―湯本間、次が江ノ電



当時別荘地として急速に発展していた鵠沼地帯と辻堂地区を江の島・鎌倉と結びさらに京浜間との交通の便を計ると共に、自らも土地開発を行っていくという趣旨のものだった。しかし翌大正 12（1923）.9. 1 の関東大震災のため、この鉄道敷設事業は大打撃を受け、その余波を受けた「昭和恐慌」と呼ばれる大不況のため、多くの銀行が休業し失業者が増えていった。「東海土地電気」は、この時辻堂停車場の敷地まで買収していたが、度重なる工事延期願いのため、昭和 5(1930) 年に免許取消になり[*1]、立消えてしまった。

現在、この地域の発展状況をみると、この新線計画が実現できなかったのは惜しまれることである。

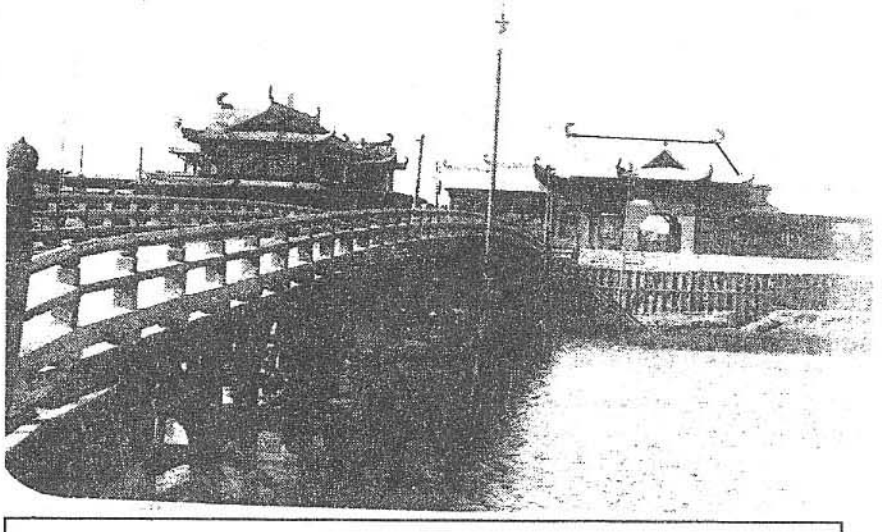
---

*1 西の方に延ばそうとした計画は、辻堂地区に徳川時代からあった鉄砲演習地のために、軍の反対もあって、どうしても駄目だったという事情もあったという。（いや、そうでは無かったと言う人も…）《昭 37《1962》6. 20 江ノ電六十年記座談会記事》

トピック

江ノ電茅ケ崎新線と小田急江の島線との関係

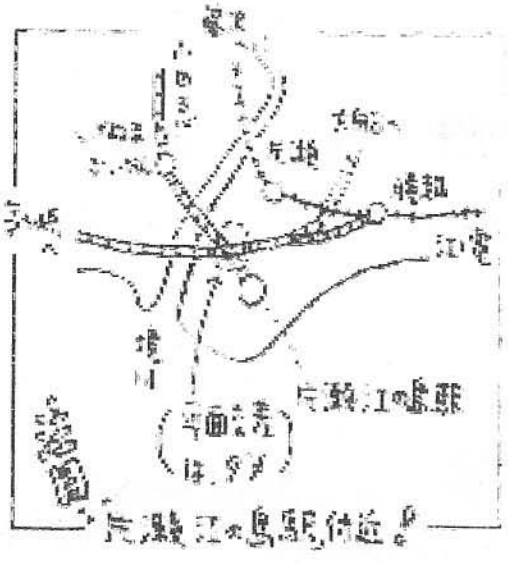
江ノ電茅ケ崎新線工事が前述のように大幅に遅れていた頃、「小田急」も片瀬海岸方面への延長計画を持ち、大正15（1926）11．28敷設を申請したが昭和2（1927）12．27付認可され、昭4.2.13着工することになる。（「小田急50年史」による）但し認可には次のような条件がついていた。



竜宮城の形の小田急片瀬江ノ島駅（右側）　実は6ヶ月限りの仮駅だった

《条件》『将来、江ノ島電気鉄道株式会社茅ケ崎―江の島間鉄道建設工事実施ノ場合ハ、ソノ平面交差ヲ避ケルタメ速ヤカニコレヲ撤廃スベシ。本仮設物（片瀬江ノ島駅）ノ使用期限ハ昭和4年9月30日迄トス』

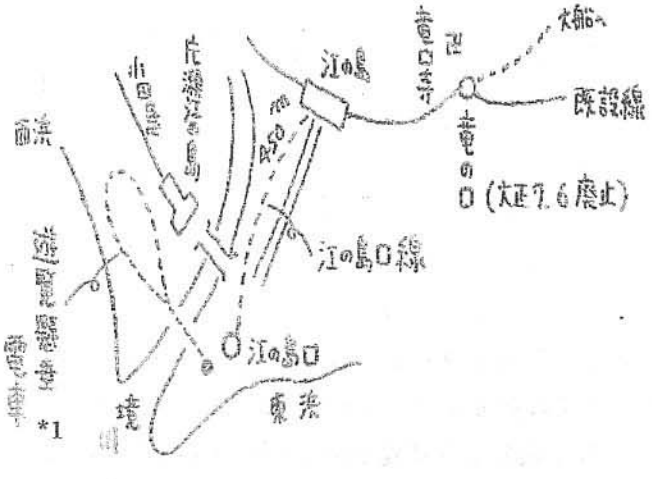
営業開始は同年4月1日だった。つまり、小田急の申請に対しては、「江ノ電」の計画が先に出ているから、それが完成するまでの約6か月（4/1～9/30）間の夏場だけの期限付きで認めるということだった。上の写真のように竜宮城を思わせる珍しいスタイルの駅舎は実は6か月だけの仮駅として誕生したのだった。しかし、江ノ電新線計画の方が駄目になってしまった〔昭和5（1930）新線許可取消〕ので、小田急がそのまま居座るという形になったのである。（江ノ電沿線新聞平成12.3.1号）



P.４０　の神奈川交通地図にもあるように、小田急の片瀬江ノ島駅は境川の東へ計画されていたから、両線の平面交差地点は当初、今の江の島へ渡る「地下道入口」付近だったらしい。そこでは、あとあと具合が悪いから、駅の方を後退させて作ったのではないかと想像してみた。

○江の島口線（支線）

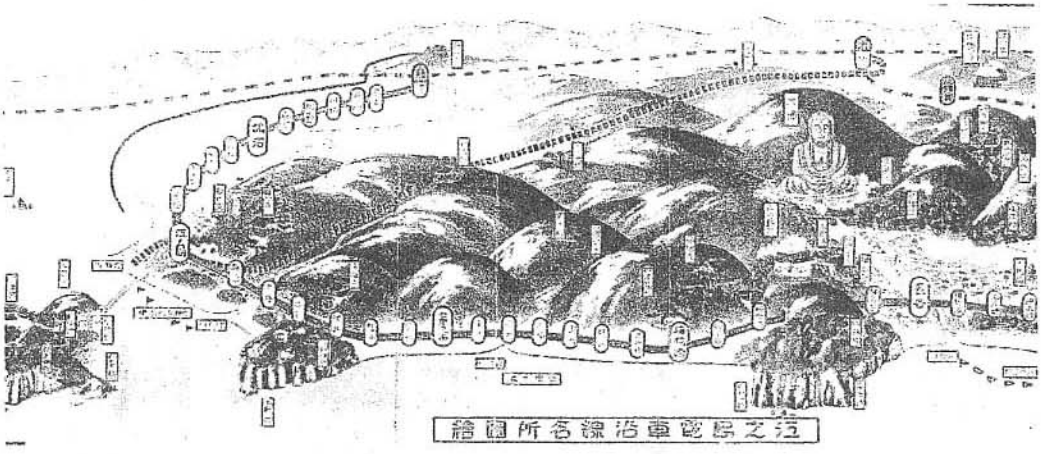
昭和４（1929）6．29付で江の島駅（昭4．3．1片瀬より名称変更）から分岐し、桟橋付近までの延長申請がなされているが、これは同年４月１日に小田急江の島線が開通し、片瀬江ノ島駅が開設されることに刺激されたものといってよい。更に小田急線と競合して、京浜方面からの観光客誘致を考慮した大船線の延長計画としても考えられる。江の島口線が今の洲鼻通りを通る計画だったか、境川寄りの道かあるいはもっと東浜に近いところだったかは明らかではない。



*1　昭和２（1927）年川口村片瀬より片瀬川（境川）を横断して西浜へ向かい循環する全長880尺（約300m）の遊覧懸垂電車（ロープウェイ）計画があり、架設免許が出たが実現困難で見送られた。

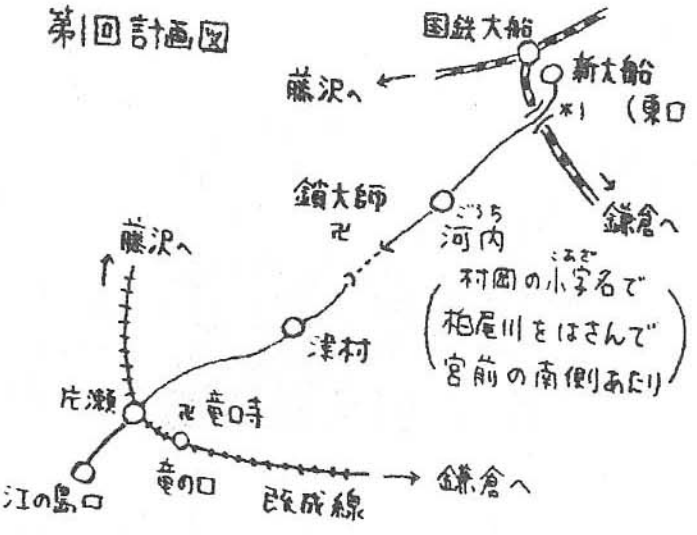
（2）江の島（片瀬）―大船線

第１回計画



会社発行の沿線案内図（昭和３年頃）停留所が沢山ある。大船までの未成線は昭和５（1930）年春開通の予定と原図には記載されている。▬▬▬▬ 部が未成線（神奈川鉄道写真集　郷土出版社より）

大船線の構想はＰ．４２の図からも読みとれるが、大正15（1926）11．26東海土地電気（株）の計画を引き継ぐ形で、新しく創立した「江ノ島電気鉄道株式会社」は改めて大船方面への延長計画を打ち出した。“鎌倉郡川口村（現藤沢市片瀬）より同郡大船町（旧



*1 今のモノレール陸橋と同じ所

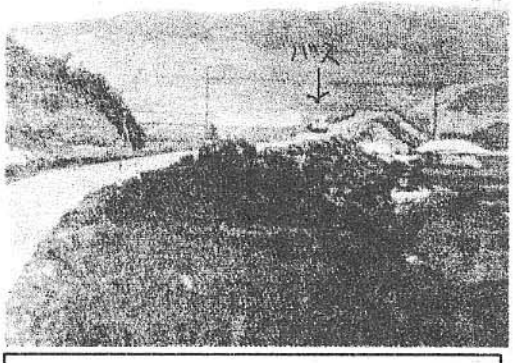
小坂村）に至る延長 7.02Km 鉄道敷設免許申請”であり、同年 12. 10 その許可を受けた。

この構想の中で、起点と終点は「江の島口」と「新大船」になっていることは注目してよい。国鉄（当時）との連絡によい大船駅東口から江の島（入口）に至る 4.29 マイル（約 7.02Km）の建設工事費は 150 万円であり、工事は大船側から着工されていたことが当時の資料から読みとれる。

《江の島電車の土地買収》

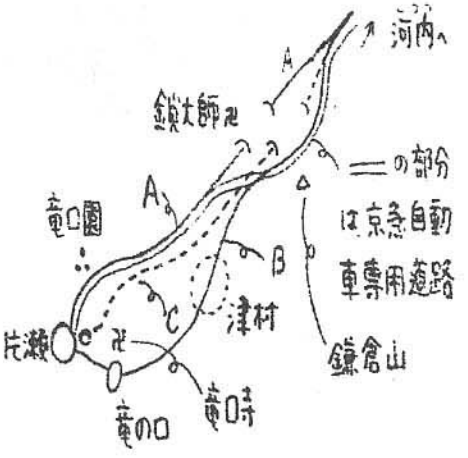
昭和２.3.31　鉄道時報

大船駅東口より小坂村台、地先遠方信号機付近の横須賀線を横断して、深沢村山崎、町屋・手広を経て川口村片瀬に通ずる江の島電気鉄道の測量は既に終了し、目下敷地買収を地主と交渉中であるが、深沢村は坪当り２～３円、小坂村は最低坪当り５円で、小坂村分は４月２日に会合して決定を見る筈、（原文のまま）



昭和５年頃の京急自動車専用道路。深沢―町屋間あたり？中央右に小型バスが見える（鎌倉市政要覧より）

〈大船線の経路〉P.４５の図と下の計画図上に示された新線経由地は実は一致していない。



略図で比較してみると、龍口寺の裏山の越え方と鎌倉山や手広の切通しを越えるのにどちらを経由するかの違いである。A は龍口寺と龍口園の急坂を行き、鎖大師近くをトンネルで抜けて深沢方面へ、Bは龍口寺裏山越えは大変だから、腰越―津村の平坦地を通り鎌倉山を切通しで抜ける案で、双方が検討され修正が加えられて来た跡が読みとれる。（C は現湘南モノレール路線）

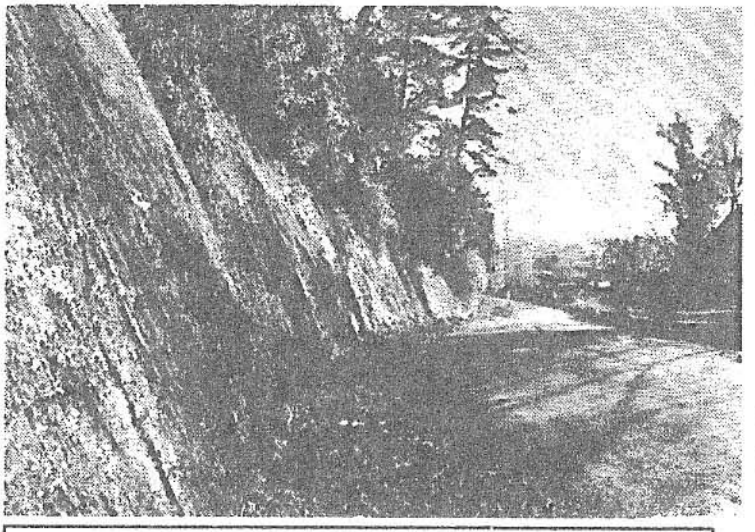
また「江ノ島電気鉄道株式会社増資新株式募集要項」（昭和３年）の線路見取り図（P５４）を見ると上図Aの═══ 部分を通っ

ているので、後の大船―片瀬の自動車専用道路（京浜急行道路ともいう）となった同じ道筋に敷設する計画であったことが、窺がえる。なお、この募集要項の図には、それ以外にも「逗子・葉山に至る海岸路線の建設……」と当時、江ノ電は壮大な計画を持っていたことが偲ばれる。しかし、これら新線計画は、会社自体が政争の渦中に巻き込まれ、争議などのため容易に進まず、江ノ電既設線は東電江の島線（東京電燈会社線）として買収され、大船線延長計画はその敷設権を「日本自動車道株式会社」に譲渡することになった（昭和5）が、この会社は鉄道敷設をやめて有料の自動車道にしてしまったのである。（国鉄文書では昭和8譲渡とある）

《自動車道路エピソード》

江ノ電大船新線の計画路上を自動車（バス）が走ることになった。下の写真は昭和5年の頃の大船駅バス発着所の光景（今の東口ルミネ付近）。開通当時は利用者は少なく、バスは20人位の小型乗合自動車だった。（写真）↓

（わたしの鎌倉物語・リーブ企画株、所載）



龍口寺裏山付近　昭和5（1930）7.15開通

（湘南を走る江ノ電　所載）

←（写真）この道路[*1]は舗装された日本最初の自動車専用道路といわれた。付近の村民や遠く逗子方面から一度踏んでみたいと見物にきて、たんたんとした道路を見た人は「履物で汚しては悪い」とはだしになって道端を歩いた。…　という話が伝えられている。

2.大船ルート再燃、夢もう一度

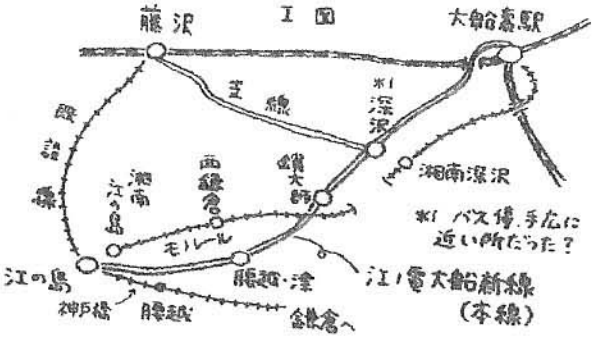
第2回計画　　終戦直後の昭和23（1948）年、世の中が戦後処理と制度改革に追われている頃、大船新線計画が再び持ち上がった。第1回の計画より20年以上たっていた。

本線…江の島―腰越・津―鎖大師―深沢―大船裏駅　としての6.2Kmに続き、少しおくれて昭和27（1952）年途中の深沢から分岐して藤沢駅に至る支線約2Kmの地方鉄道敷設免許を申請することになった。（本線申請は昭和23. 5. 25）この再建設計画路線は、先に今の自動車専用道路に当たるところに計画、認可された第1回目の鉄道

---

*1 自動車専用道路だから、要所には遮断機がついていて料金徴収係の人が立っていた。龍口寺脇（旧龍口明神社石段前）の終点にも遮断機とバスの向きを変える回転盤（ターンテーブル）があって、そこにのせたバスを運転手らが手押しでぐるっと回していた。

敷設権を日本自動車道（株）に譲った後であるから、計画路線は前と当然異なっていた。



今回は左図のように、神戸（ごうど）橋手前を曲がり、大船方面と結ぶ県道沿いであり、今の湘南モノレール軌道とは全く別のものであった。この新線計画は、当時江ノ電従業員の間では話題が持ちきりであったという。路線の構造は高架線で騒音防止対策を施した画期的な新車を走らせるというものであったとか…。このようにこの時は「高速鉄道」の免許を申請し、国鉄との直通運転をも計画したものと思われる[*1]。

しかし、この場合も掛声だけに終わり、実らなかった。

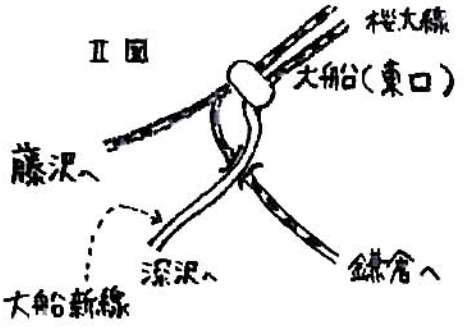
大船新線第２回計画の分岐点として考えられた地点付近。右手前が腰越駅。電車の前の橋（神戸橋）を渡らずにすぐ右へ曲がれば津村へ行く道があった。明治 40（1907）年の絵葉書（写真）。　（岩田武　神奈川鉄道写真集　所載）

3回計画

悲願達成の三度目の勝負をかけたものと思われる大船新線計画は、数年後の昭和 31（1956）．11．15 に２回目と同じく地方鉄道敷設免許申請として、

---

*1 川島令三　全国鉄道事情大研究　湘南編　草思社による。



江の島―大船　6.8k
藤沢―深沢　　2.5k

の前回（昭和23）と同様の計画が出された。

この時代は、昭和31～35年にかけて、財政的には景気の急上昇の時代を迎えており、神武景気とか岩戸景気と呼ばれ、消費ブーム・レジャーブームが起こっていた。東京タワーが完成したり、1万円札や5000円札が発行されたのもこの頃であるが、労働者のストが頻発したのもこの時代の特徴であった。この第3回目の計画は前頁の上の図と似ているが分岐点は龍口寺山門前上州屋そばの細い道から入り津村に達する案と神戸橋手前を山側に折れて県道沿いに進む2案があったように読みとれる。しかし今回は、江ノ電既成線のような路面電車的な体質を引き継ぐものではなく、より近代的な高速鉄道への脱皮がうかがえるものという見方があった。第2回計画時にウワサされた“高架で騒音防止対策のある新車…”の構想を更に上まわるものだったようだ。それは国鉄（ＪＲ）の桜木町―大船間の新線構想（桜大線=現在の根岸線）と相まって、大船での相互乗り入れが念頭にあったのではないかと推察できるからである。上のⅡ図で大船駅の位置が西口（裏駅）から東口に変わっていることに注目したい。

根岸線　103系

江ノ電　500形

相互乗り入れとなると、江ノ電車体・設備のすべてを一回り大きく改造してゆかなければならなかった。

《根岸線に乗り入れ》

この壮大な計画は、日常の湘南―京浜間の通勤・通学者輸送と夏季の海水浴客輸送に、都心から又都心への利用者には非常に便利になることだろう。そのためには当然ＪＲ車輌並の大型新造車（20m級）とそれが走れる施設完備が検討れていたのではなかろうか。

ＪＲ根岸線は、その頃計画され一部工事が始められていた。〔桜木町～大船間全線開通は昭和 48（1973）4. 9〕

しかし、江ノ電の方は会社の経営方針が『鉄道建設』より直接『観光事業』に熱を入れる方向に変わってきた。社名を既に昭和 24 年（1949）「江ノ島鎌倉観光株式会社」と改めて観光施設や遊園地経営に乗り出し、バス路線拡張に向け事業を拡大することにもなった[*1]。そうした理由で、10 年以上検討されたにもかかわらず、またまた計画だおれになってしまい“三度目の正直”とはいかず、昭和 44（1969）年地方鉄道　江の島―大船、藤沢―深沢間免許取下願が出され、遂に“幻の大船線”になってしまったのである。

今、その道を江ノ電バスが縦横に走り、軌道敷設権を譲渡した第１回計画の鎌倉山を抜ける大船自動車専用道路には京浜急行バスが通り、その上を湘南モノレール[*2]が営業運転を続けている。

《付　深沢支線》

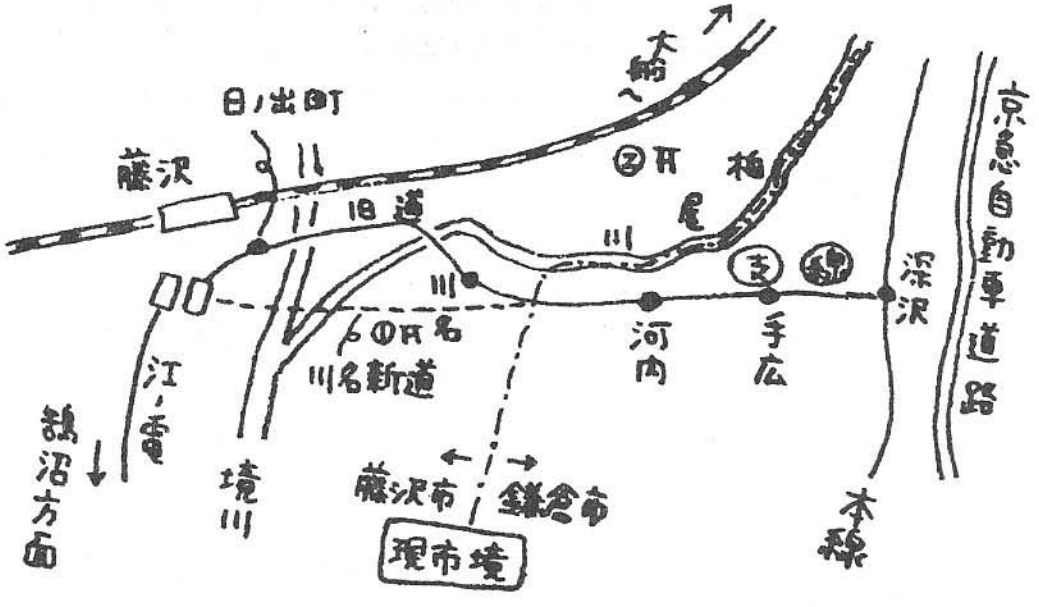
大船新線の支線として、深沢―藤沢間が計画されたのは、既に述べたように昭和 27（1952）年と昭和３１（1956）年頃とである。深沢村は昭和 23（1948）年に、鎌倉市と合併し昭和 28（1953）年頃、三菱電機大船工場の増設をはじめ、各種工場誘致が本格化し、かっての純農村地帯は、工場や住宅用地として、どんどん開発されていった。この支線は交通に恵まれなかった農村地帯と周辺都市とを結び、地域の活性化と藤沢・大船両駅を利用する通勤者の便をもはかるのが最大の目的であったろう。計画路線はおそらく、今江ノ電バスの走っている道（日ノ出町まわり）が

---

*1 藤沢駅―深沢―鎌倉駅《昭和 24（1949）6.11 開業》　大船駅―手広―鎖大師《昭和 35（1960）12.1》…津村まで延長《昭和 36（1961）8.1》　藤沢駅―片瀬山循環《昭和 44（1969）7.7》

*2 昭和 46（1971）7.1 全線開通、なお桟橋近くまで行き右折、小田急片瀬江ノ島駅近くを通り、茅ケ崎まで延長計画があったが土地買収ができなかった。

考えられたに違いない。切通しを作るような山地はないが、洪水による氾濫の激しかった柏尾川沿いの軌道作りは最大の関心事であったろう[*1]。



川名新道は昭和 36（1961）年完成だから支線計画時にはなかった。①は川名御霊神社②は宮前御霊神社

大船新線についていろいろと歴史をふり返ってきたが、仮に本線計画道に江ノ電新車が通っていれば、それは箱根登山鉄道に負けず劣らずの急勾配と急カーブを行く鉄道として注目される存在になっていたに違いないと江ノ電通の識者たちは口をそろえる。諸兄には一度この未成線（計画路線）の予定地をたどり付近の景観を楽しまれることをお勧めしたい。

（江ノ電の現社名は「江ノ島電鉄株式会社」である。昭和 56 《1981》９．１変更）

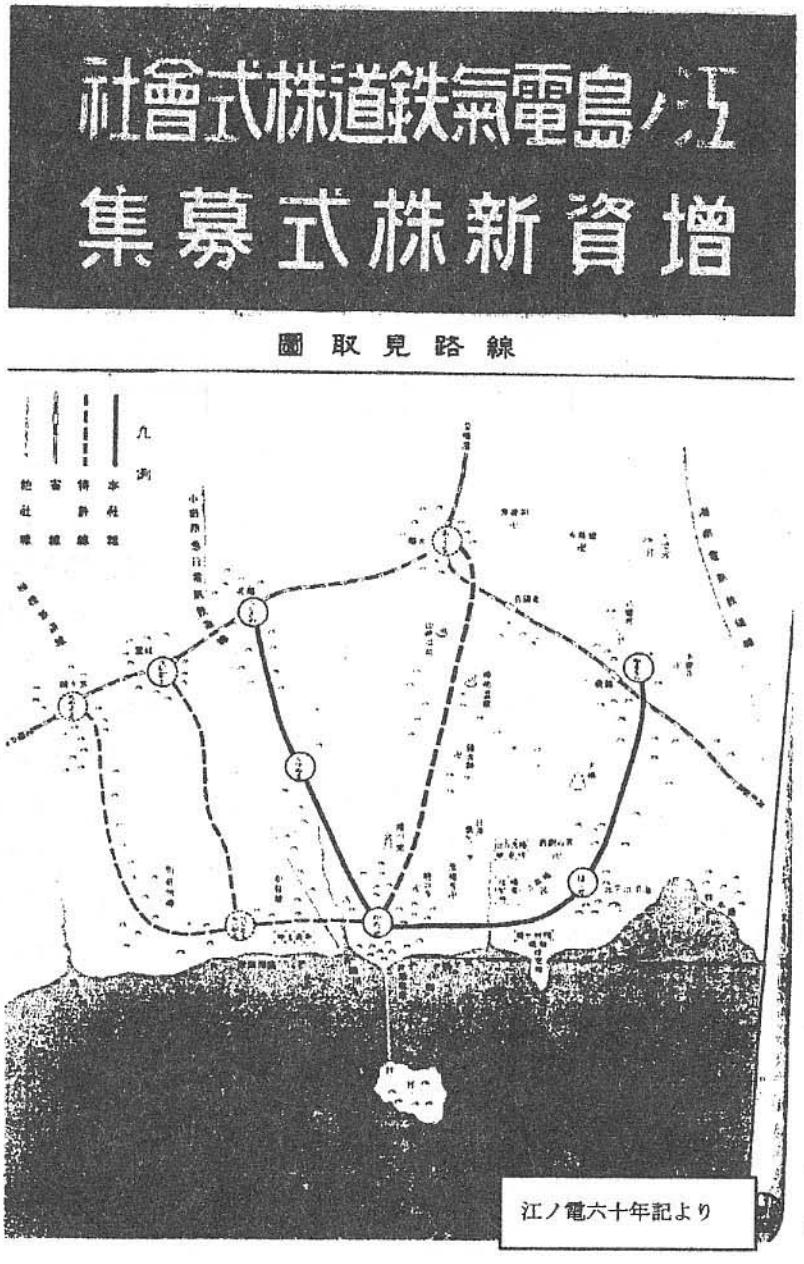
---

*1 大正８（1919）年、７年もかかって村民の努力により、柏尾川の両岸に高い堤防がまっすぐ作られたが、大正１２（１９２３）年の関東大震災により壊され、直すのに又５年もかかった。その後昭和４１（１９６６）年台風で氾濫、川名で１００軒床上浸水した。

《参考図書類》

藤沢市史第６巻・藤沢市史年表	藤沢市
新版　神奈川県の歴史散歩　上・下巻	山川出版
高木勇夫　地図に刻まれた歴史と景観　藤沢市	新人物往来社
服部清道　写真集　明治・大正・昭和	図書刊行会
江ノ電六十年記	江ノ島電鉄株式会社
小田急五十年史	小田急電鉄株式会社
飛田康行　江ノ電鉄道史	江ノ電鉄道研究同好会
〃　江ノ電 75 年略史	江ノ電鉄道研究会
吉川文夫　江ノ電讃歌	大正出版
吉田克彦　湘南再発見	江ノ電沿線新聞社
昭和３年頃の江ノ電沿線案内図	江ノ電㈱
昭和 30.4.10 発行　江ノ電観光ニュース	〃
昭和４.8.10　発行　神奈川県交通地図	東京日日新聞社
岩田　武　神奈川鉄道写真集	郷土出版社
長谷川弘和・吉川文夫　かながわの鉄道	かながわ合同出版
川島令三　全国鉄道事情大研究　湘南編	草思社
わたしの鎌倉物語	リーブ企画株式会社
昭和５８年版　市勢要覧　かまくらグラフ版	鎌倉市
広報ふじさわ特集号　わたしの藤沢 17	藤沢市
平成１３年８月１日号　江ノ電沿線新聞	江ノ電沿線新聞社
諏訪雅珍　日本の風物と伝承シリーズ 44	ふるさと風物伝承研究会
	その他

（後記）以上が、すわまさよし氏の『日本の風物と伝承シリーズ　４４』に記載されている明治大正昭和の時代に様々な企画をもった江ノ電の姿である。



左の写真は昭和３年に売り出した増資株式募集の広告である。茅ヶ崎・辻堂線や大船・片瀬線、が計画路線として明示されている。さらに文中にもあるように逗子・葉山線も構想にもあったようで、観光鉄道の要素を十分に持っていたことになる。

このように多くの夢を描いた江ノ電の計画がもし実現されていたとしたら、湘南の海沿いを走る電車は、スペインの北西部の大西洋に面した保養地ラ・コルニィヤアの海岸沿いを走る可愛い電車に匹敵する美しい情景となっていただろう。

〈編者記〉

硲（はざま）伊之助と鵠沼

岡田　哲明（会員）

硲伊之助略歴

硲伊之助は明治28年東京市本所区向島に硲文七、八重の三男として生まれる。十六歳で慶応普通部を中退し日本水彩画会研究所研究生となり夜間は暁星学園でフランス語を学ぶ。日本洋画界の草創期に画才を認められ、在野美術運動の魁といえるフュウザン会（第1回はヒュウザン会と称した）に最年少で参加する。大正3年第1回二科展で**「女の習作」**で二科賞。大正7年第5回二科展で**「鵠沼の白い橋」「鵠沼風景」**など26点を出品し再度二科賞を受賞する。

大正10年7月31日クライスト丸にて横浜を出港しフランスに渡る。坂本繁次郎、林倭衛、小出楢重等と一緒であった。渡仏の様子は岩波文庫小出楢重随筆集「欧州からの手紙」に詳しい。ちなみに小出は邦枝完二の新聞連載小説「雨中双景」「東洲斎写楽」の挿絵を描いた画家である。　硲はマチスに師事し、昭和4年11月4日にフランス人の妻ロゾラン・アデリア・エルビラとともにシベリア鉄道経由で帰国する。昭和8年再渡仏、版画家、長谷川潔とともに「日本の近代版画とその起源展」（パリ装飾美術館）の開催に尽力した。というのも伊之助は木版画やリトグラフも手がけており、この展覧会に木版画**「蛙」**を出品している。

昭和10年春、帰国。昭和12年一水会創立に参加、第1回展に**「鵠沼の想い出」「砂丘」**ほかを出品する。以後、一水会に所属しながら戦中戦後のしばらく文展日展に参加、東京芸大の助教授をつとめる。

昭和25年マチスに招聘され3度目の渡仏。戦後、国内最初のマチス展、ピカソ展、ブラック展の実現に尽力し翌年に帰国する。昭和28年、日展に審査員として木版画**「潮来」**を出品し文部省買い上げとなる。

戦中頃より粗悪な油絵具の変色のひどさに失望し、色絵磁器に関心を持ち、昭和25,6年ころより九谷焼、色絵染付けをはじめる。三彩亭と号し、今泉今右衛門酒井田柿右衛門、荒川豊蔵、木下義謙、藤原啓等と一水会に陶芸部を創設し、皿や鉢などに西洋画のデッサンに基づく写実的な技法で風景、人物、動植物を描く独創的なジャンルを開拓する。昭和37年、加賀市吸坂に工房を建てて作陶に専念するようになる。

また文壇との交友も広く、新聞の連載小説、雑誌の挿絵や単行本の装丁を手がけた作家は、井伏鱒二、岸田国士、佐藤春夫、芹沢光治良、谷崎潤一郎、丹羽文雄、林芙美子、石川達三、川端康成、高見順、徳田秋声、中村武羅夫、火野葦平太田洋子等多数にのぼる。

著書には「コロー」「クールベ」「マチス」（いずれもアトリエ社）のほかエッセイ「パリの窓」、画文集「大東京百景」、訳書には「ゴッホの手紙」上、中、下巻（岩波文庫）がある。また新聞、雑誌に画論、美術評論などの発表多数。

さらにフランス近現代の洋画蒐集家でもあり、1997年秋、ブリジストン美術館企画展「西洋美術に魅せられた 15 人のコレクターたち」において硲伊之助はこの 15 人のうちに選ばれている。同美術館の収蔵品のうちルソーの「イヴリー河岸」マチスの「コリウール」など数点は彼が日本に齎した作品である。

昭和52年8月16日石川県加賀市吸坂で81年の生涯を閉じた。

鵠沼硲別荘

硲家が鵠沼に別荘を所有していたのは大正 5 年から昭和 15 年頃までで、所在地は今の住居表示でいう鵠沼海岸 2 丁目 16 番「東急ドエル・シーサイドコート鵠沼海岸」のところで、敷地は国道 134 号線ができるまでは 3,000 坪はあったという。硲伊之助の父、文七は紀州和歌山の出身で日本橋の漆器商、木村屋の番頭を勤め、かたわら石油商をいとなみ東武鉄道などに重油を納めていた。伊之助が育った頃は、向島の硲家は敷地一万坪余、すでに相当な資産家として財を成していたという。

大正 5 年、伊之助は結核を患い硲家はその療養の目的で鵠沼に別荘を構え療養生活を送らせた。この時期が鵠沼をモチーフとした第 1 期といえる。硲の家族はその後、毎夏、ここに避暑に来るのが慣わしとなった。

伊之助の妹、八代子（明治 42 年生まれ、私の妻の母）は関東大震災に、ここで罹災している。女学校 2 年生であった。義母から生前聞かされた話では、津波に追い立てられるようにして祖母とお隣の藤堂さんのご家族と一緒に高台のほうに必死で逃げたという。後に立ち戻ってみると 2 階建ての母屋は津波の引いた後 1 階が波にさらわれ 2 階部分が平屋のようになってしまっていた。丁度高床式の平屋のような感じで、それに手を加えてその後も別荘として使用したらしい。また、大きな池があったが震災後はちいさくなってしまったという。

「鵠沼の想い出」20 号　1937 年　（森鴎外の子息、於菟がモデルといわれている）

「砂　丘」10 号　1937 年　「夏の午後の陽射しにくっきりと浮き出した色は暑苦しいものだが、海岸で見ると、周囲の明確な水着の色や海水浴場の空気とよく調和していて返って愉快だ。この絵は今年の夏、鵠沼で試みたのですが人の来そうにない場所でも時折砂丘からひょっこり頭がでて、こっちをのぞきこむので困りました」（雑誌みずゑ 1938 年 1 月号掲載の自作解説より）

昭和4年から2度目の渡欧をする昭和8年の間が鵠沼を描く第2期である。

八代子は昭和9年3月、高桑雄吉と結婚。この敷地内に家を建ててもらい、昭和15年まで居住した。当時敷地内にはほかに3棟ほど建屋があって、その1棟で丸政の親戚筋にあたる石井利作さんお松さん夫妻一家が別荘番をしていた。

丁度このころは、伊之助は二度目の洋行から戻った時（昭和10年）で仲の良かった妹のところに良く遊びにきた。鵠沼をモチーフとする第3期である。

長谷川路可との交友はおそらく滞欧中に始まったもののようで、第2期、第3期頃は、互いに親しく行き来したと八代子は語っている。

フュウザン会の頃

文献1）　硲伊之助作品集〈昭和52年　渓水社刊　500部限定〉「硲伊之助さんのこと、序にかえて」井伏鱒二　（原文のまま）

硲伊之助は慶応普通部の生徒の頃、目白台の水彩画研究所に通っていた。その関係でフランス新帰朝の若い画家斉藤與里に才能を認められ、斉藤や岸田劉生などの作ったフューザン会の会員にされた。「伊之さん」と愛称されていた硲伊之助十六歳の時であった。この「伊之さん」の出現について、フューザン会の申し子が生まれたという人がいた。大正元年九月上旬、読売新聞社三階で催されたフューザン会第一回展覧会の初日、会場へ来た伊之助は肩上げをした紺がすりの着物に袴をはいて、頭をぐりぐり坊主に剃っていた。当時、慶応普通部の生徒が外出するときの服装であった。フューザン会は高村光太郎を中心に斉藤與里、岸田劉生、清宮彬の三人で発足した。文展に飽き足らぬ若い画家たちの集団である。萬鉄五郎、小林徳三郎、木村荘八、高村光太郎、岸田劉生、齋藤與里、硲伊之助など、十六人の作品百三十三点が陳列され、画壇に新風をもたらす一大快挙として反響を呼んだ。そのころマリネッチたちの未来派が紹介され、カンジンスキーの画論なども少しずつ紹介されて、新風の気が若い画学生たちの間に漲っていた。小林徳三郎は沈着に絵を描いていた。萬鉄五郎などは美術学校を休んで下谷の寺の坊さんに連れられアメリカ一周の旅に出て、セザンヌやゴッホの真物の作品を見て来たと言っていた。高村光太郎はフランスから帰りたてで、新しい文学と新しい絵画と新しい詩の先導者のように言われていた。〈中略〉

フューザン会の第二回展は翌年三月、同じ会場で開かれた。硲伊之助と萬鉄五

郎は第五室を二人だけの作品で占めた。高村光太郎は第六室に彫刻「首」などを出した。この会も大きな反響を呼んで、「クンスト」や「ステュデイオ」など外国の美術雑誌にも記事が出た。このときの作品は京都にも送られて京都図書館で公開された。ところが、会員たち一同の集会の席で、劉生が與里の作品を誹謗したことから仲間割れとなり解散となった。〈中略〉

そのころ硲さんは、お父さんに買ってもらった雑司が谷のアトリエで自炊生活をつづけていた。お母さんのよこした婆やが一緒にいたが、これは硲さんのお行儀を取り締まるのが任務で、若気の過ちや艶聞の立つようなことでもあると、すぐお袋さんに電話で告げ口をした。そのつど、お袋さんが意見をしに駆けつけた。

このアトリエには仙台から幾つも年の違わない松倉珏造が弟子にしてくれといって尋ねてきた。これには驚いた。ひところは年少の画学生栗原信がその知人の大野氏と一緒にきて、同じ地所の中にあった小屋に住んでいた。硲さんは約一年余りこのアトリエに住み、胸を悪くして鵠沼の別荘で療養生活に入った。ここには岸田劉生がよく遊びに来た。ここの別荘番の福さんという人と劉生はよく将棋をさした。福さんは三度に一度ぐらいわざと負けて、「おお、しもうた」と顔に手をやって劉生の機嫌を損ねぬ術を心得ていた。福さんは劉生のお気に入りであった。この頃は、椿貞雄、木村荘八とは研究所で顔を合わせるくらいで、それほど親密にはなっていなかった。この別荘から、いったん向島の自宅に帰って、それから我孫子へ移った。〈以下略〉

岸田劉生および東屋関連

文献 2)　イ、劉生年譜(岸田劉生麗子と鵠沼風景)
　　ロ、伊之助年譜(硲伊之助作品集)
　　ハ、摘録劉生日記(岩波文庫)

大正 3 年　第 1 回二科展、伊之助**「女の習作」**で二科賞受賞（ロ）

大正 6 年　劉生鵠沼に転居、第 4 回二科展「初夏の小路」で二科賞受賞（イ）

大正 7 年　伊之助第 5 回二科展に**「鵠沼風景」「鵠沼の白い橋」「沼に寄れる一本の木」**など 26 点を特陳、再度二科賞受賞（ロ）
　　劉生同展に「川幡氏の肖像」など油絵 4 点、彫刻 1 点入選するが静物 1 点落選する。（イ）

大正 10 年 4 月 5 日伊之助、劉生を訪問する。（ハ）

「二人を二階に待たせて麗子をかく。しばらくしたら硲が来る。硲一時間ほどで帰り、また麗子をつづける。」とある。

7月伊之助渡仏（ロ）

大正12年9月関東大震災、劉生鵠沼を去る。（イ）

昭和4年　伊之助帰国、第7回春陽会展に滞欧作特陳（ロ）

文献3）鵠沼海岸百年の歴史　高木和男著

文人以外には、画家としてフュウザン会の岸田劉生、木村荘八、なども東屋に逗留していた。岸田劉生は後に紹介する「鵠沼日記」を残した。裕伊之助、横堀角次郎も逗留したことがあったようだ。(p57)　[裕は硲のミスプリに相違ない]

伊之助の鵠沼、湘南作品

第1期（大正5年から大正10年まで）

「鵠沼風景」「鵠沼の白い橋」「沼に寄れる一本の木」(?)**「沼の岸」**(?)

第2期（昭和4年から昭和8年まで）

「有島生馬氏邸」

第3期（昭和10年から昭和15年まで）

「鵠沼の思い出」「砂丘」「少憩」（春の海辺：帝国大学新聞）（**日曜の散歩**:三田新聞）

註：「　」は油絵、（　）はスケッチ、？は鵠沼かどうか不確かのもの。

以上、硲伊之助の鵠沼を描いた作品の文献はあるものの上記のうち現存する絵が目下のところ**「鵠沼の思い出」**以外に所在が不明なのはまことに残念である。

硲伊之助美術館

硲伊之助美術館（加賀市吸坂4-3）について女優の岸田今日子のエッセイ集「妄想の森」（文献5）から同名の題の文章を引用する。

雑誌の仕事で金沢へ行った。二泊三日の中で金沢らしい街並みやお店を見たり、おいしいものを食べて写真を撮るのんきな仕事で、この次自分がどこへ行くかも人任せだ。二日目の晩は粟津温泉に泊まって、朝になった。「今日は九谷焼の窯元に寄ってから硲伊之助美術館へ行きます。」と言われて、私は一瞬、時が止まった

ような奇妙な感覚に襲われた。硲伊之助という名前は子供の頃の私にとってどんなに親しい名前だっただろう。硲さんは三十数年前に死んだ父(岸田国士)の親友だった。

父の小説の挿絵を描いて下さったり、仕事の上でもよく組んでいたけれど、その前に、気の合う友達としてよく遊びに見えていた。同年代だったし、どちらもフランスに留学して、どこか通じ合う雰囲気を持っていたのだ。硲さんはやせて背が高く、物静かで、茶系のホームスパンのスーツが似合った。そしていつもＩさんという若いきれいな女の人と一緒だった。Ｉさんはほっそりと小柄で、燃えるような目をした声楽家だった。硲さんの奥さんには会ったことがなくて、フランス人だと聞いていた。硲さんとＩさんとが、お互いをどれほど大事に思っているかは、子供の目にもよくわかった。私は十歳前後だったろうか。こどもというのは本当に、何でもわかるものなのだ。けれどもいつのまにかＩさんのなまえがＰさんに変わった。イタリー人と結婚したという。硲さんとＰさんになったＩさんは、同じように遊びに見えたし、やっぱり一番大事なものを見るようにお互いを見ていた。

Ｐさんの小さな音楽会を、うちの居間で開いたことがある。父や硲さんの友人、近所の人たちが座った前で、透き通るように白い顔が少し染まり、眼はいつもよりもっと輝いて、小さな体であんな高い声を出すのはかわいそうと、ふとおもった。硲さんはそんなＰさんをいつもの恥ずかしそうな笑顔で見つめていた。三十六歳の若さでＰさんが亡くなった。硲さんはやがて、東京を離れたと聞いた。そして何かが終わったのだった。わたしは硲さんとＰさんの中に、大人そのもの、男と女というもの、何か割り切れないもの、けれど美しいもの、悲しいもの、たぶん愛というものを勝手に見つけ、ふくらませ、夢見ていた。

晩年の硲さんのアトリエが、美術館のそばにあった。そこに寄って、硲さんの内弟子だった海部公子さんとお話する。ここにはＰさんからの手紙もたくさん残っているという。硲夫人が、絶対に離婚せず、フランスへ帰ってしまったこと、イタリーの貿易商Ｐ氏が、熱烈にＩさんにプロポーズしたこと、経済的に困っていたＩさんは、音楽を続ける、硲さんとの友情をこわさないという二つの条件を出して結婚したことを、わたしははじめて知った。美術館には見覚えのある、Ｐさんがモデルの絵も何枚かあった。そして大人になってしまったわたしは、硲さんとＰさん、それに硲夫人とＰ氏のみんなが同じ悲しさで見えてきたことに驚いた。

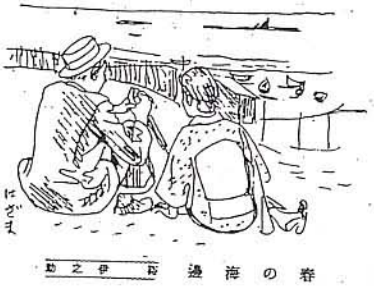
（初出　一枚の絵８９年３月号）

アデリア夫人会見記

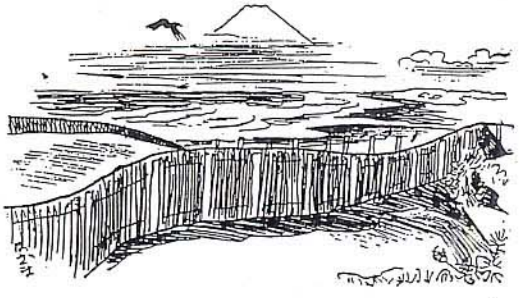
在日中のハザマ・アデリアは白木屋デパート洋装部のコンサルタント兼デザイナーとして洋服生地の柄のデザインなどをした。群馬県高崎の織物の資料に彼女のデザインと思われるデザイン帳が保存されているときく。

昭和 12 年、国際情勢が緊張を増す中、彼女はフランスに帰国する。そして戦争、日本の敗戦。昭和 25 年マチスに呼ばれて伊之助がニースに飛んだとき、二人は再会した訳だが伊之助はアデリアを日本に連れ帰ることはなかった。

伊之助との仲は修復されなかったが親日家の彼女は裕家とも仲良くし、戦後は何度も来日し、日仏間の親善に貢献した。彼女はニースでは日本語通訳として各界の分野の多数の日本人の世話をした。1987 年のマチス展にニース市長代理付通訳としての来日を最後に、日本に来ることもなくなり消息を気にしていたところ、平成 13 年のミセス 3 月号にアデリアの元気そうな写真と記事が掲載されているのを発見し、手頃なツアーでニースに飛び久方ぶりの会見が実現した。 97 才とは信じられない程に元気で若々しい姿に接し感慨も一入であったが、伊之助の鵠沼時代の事を聞くことはできず、インタビューが不十分な結果に終わったのは筆者としては少々心残りである。



「春の海辺」帝国大学新聞
昭和 11 年 3 月 21 日



「日曜の散歩」三田新聞
昭和 11 年 2 月 21 日

「鵠沼を語る会」活動の記録

（平成１３年４月～平成１３年９月）

総務委員会

平成１３年４月例会　　**４月１０日（火）１０時～１２時　　２２名出席**

議題１．来年度の事業計画について －公民館まつり、史跡めぐり等の行事について来月の総会にて意見を聞く。

２．公民館との共催シンポジウムについて －講師の小山先生は講演を希望、佐江先生は芥川龍之介の「蜃気楼」を朗読したいとのことで、シンポジウムを変更する。
日程は６月２日（土）１４時～１６時３０分、公民館ホールにて開催に決定。

３．会誌８２号配布について －会員、会員外の配布先と担当者を決めた。

４．その他 －会誌に記載されている「大斎藤家」について、伊藤会員より説明があった。

新入会員　　内田英一氏、渡部　瞭氏、多田和子氏紹介。

平成１３年５月例会及び第１５回総会　　**５月８日（火）１０時～１２時　　２５名出席**

議題１．公民館との共催講座について －小山先生は東屋に逗留した文人の話、佐江先生は「蜃気楼」の朗読と、芥川龍之介と鵠沼の関係について有田、佐藤会員と話し合う。
講座名を「東屋記念碑完成記念、お話と朗読の会」とする。細目については、鈴木、高三氏を中心に運営委員会にて決定する。５月１５日、２９日準備会を開催した。

２．その他 －塩沢コレクションの目録完成。

３．第１５回総会 －別紙「第１５回総会議案書」の審議を行い、全会一致で可決された。
今後の会の円滑な運営を計るため運営委員会を設け、新たに１５名の委員を選出した。委員会は毎月末火曜日に開催する。
なお、総会終了後の運営委員会で副会長３名と各業務分担を決めた。

平成１３年６月例会　　**６月１２日（火）１０時～１２時　　２２名出席**

議題１．「例会通知配布」について －例会通知は前月末の運営委員会で内容を決めて、伊藤副会長が作成し、配布については多数の運営委員が担当する伊藤副会長案にて決定。

２．今後の会のあり方について －アンケートで意見、要望、取り組み等を出してもらう。

３．公民館まつりの展示について －１４日のサークル交歓会の内容を受けて、月末の運営委員会で概要を決める。運営委員会６月２６日(火)１３時～１５時、出席１１名。

４．共催講座について －満席の２６０名も参加し、内容も素晴らしく大成功であった。

５．その他 －木村 梢氏より、戦後の「湘南文庫」について調査依頼があったこと。

勉強会 －伊藤副会長より、戦後駐留軍が撮影した鵠沼地区航空写真について話があった。

平成13年7月例会　　7月10日（火）10時～12時　　22名出席

議題1．公民館まつりについて －展示会場が従来より広いスペースで、ビデオ鑑賞もできるように、実行委員長に要望書を提出する。

2．史跡めぐりについて －江の島道、大庭、村岡、藤沢宿、東京文士村等のコースが挙がったが絞りきれず、次期例会に決定する。

3．会誌83号について －鈴木三会員より内容の概略説明があった。

4．その他 －市教育文化センター主催の座談会について、鈴木三、佐藤会員出席。

勉強会 －高木顧問より「鵠沼海岸の蜃気楼」について、当時の新聞記事のコピーを示しながら話された。 運営委員会　7月31日（火）13時～17時　9名出席

平成13年8月例会　　8月14日（火）10時～12時　　25名出席

議題1．市教育文化センター主催の座談会について －参加した鈴木三、佐藤会員より、鵠沼公民館の歴史や、サークル活動の現況について話したとの報告があった。

2．交流集会「いきいき湘南・まちづくり」について －近年、緑豊かで、静かな住環境が損なわれている現状を憂慮する湘南地区の人達が、歴史や文化の面からまちづくりを考える集会を大磯町で開く。当日は公民館まつりで、会として参加はできず有志が参加する。

3．公民館まつりについて －「東屋」記念碑完成記念を主要テーマにする。

4．史跡めぐりについて －江の島道に多数決で決定した。実施時期は11月13日（火）の例会終了後に行うことにする。

5．その他 －「湘南文庫」は戦後、本鵠沼と鵠沼海岸の2ヶ所にあった。青木会員報告。

勉強会 －青木会員より「夢の中で走った江の電」について話があった。

新入会員　猊倉　健氏紹介　運営委員会 8月28日（火）13時～17時11名出席。

平成13年9月例会　　9月18日（火）13時～15時　　22名出席

議題1．公民館まつりについて －要望書に沿った広い展示場が確保できた。テーマを「東屋の跡」記念碑完成、華ひらいた鵠沼文化－東屋と文人たち、とする。

2．鵠沼市民センター(仮称)について －資料室ができることになり、会の意図に沿った運営が行われるよう、市当局へ要望書を提出したい。完成は平成15年度見込み。

3．史跡めぐりについて －都合により11月6日（火）午後実施に変更する。

4．会誌83号について －64ページ、150部発行。10月2日（火）印刷。

勉強会 －杉本会員よりホームページと、会誌のCD－ROM化について話があった。

新入会員　桑原玲子氏紹介。運営委員会　9月18日（火）、9月25日（火）。

編集後記

＊「今年の夏は異常な暑さでした。とくに7月が暑く、東京でも40度近くに昇った日がありました。この暑さは日本だけでなく韓国でも暑かったそうですが、38度以上にはなりませんでした」。これは笑うことが健康には一番いいというので聴きに行ったときの落語の枕ですが、成る程と分かるまで10秒ぐらいかかりました。血のめぐりが悪くなったせいでしょうか？

＊この暑さのなかでの編集はなかなか大変でしたが、会員の方々の奮闘により、充実した資料性の高い83号が出来上がりました。

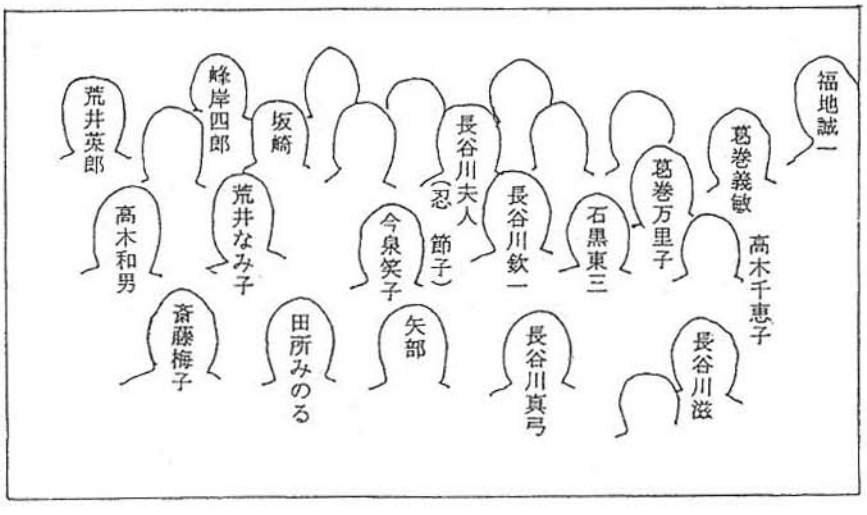
＊旅館東屋跡の石碑の建立記念の催しも、小山、佐江両先生のご協力により大成功でした。その一部を本誌に再録しましたが、素晴らしかった佐江先生の「蜃気楼」の朗読が再現できないのは残念です。

＊「夢の中で走った江の電」、「硲伊之介と鵠沼」、「二つあった湘南文庫」、建築シリーズ「林達夫邸」、そして「広田家」など実に鵠沼の歴史は豊かです。調査・取材にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

＊前号（82号）の「東屋関連年表」25頁を次のように訂正します。

大正15年８月中旬→　７月中旬　龍之介、近くの「イ－4号」に転居。その後妻子を田端に帰し、龍之介は東屋に滞在、富士医師の診察をうける。

＊また同号38頁の「なぎさクラブ」の写真の説明で、筆者の高木千恵子氏を間違えました。その後判明した他の方々のお名前と共に下に掲げ、訂正とお詫びをいたします。ご諒承のほど願い上げます。　（鈴木）



『鵠沼』 第83号
平成13年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2001